

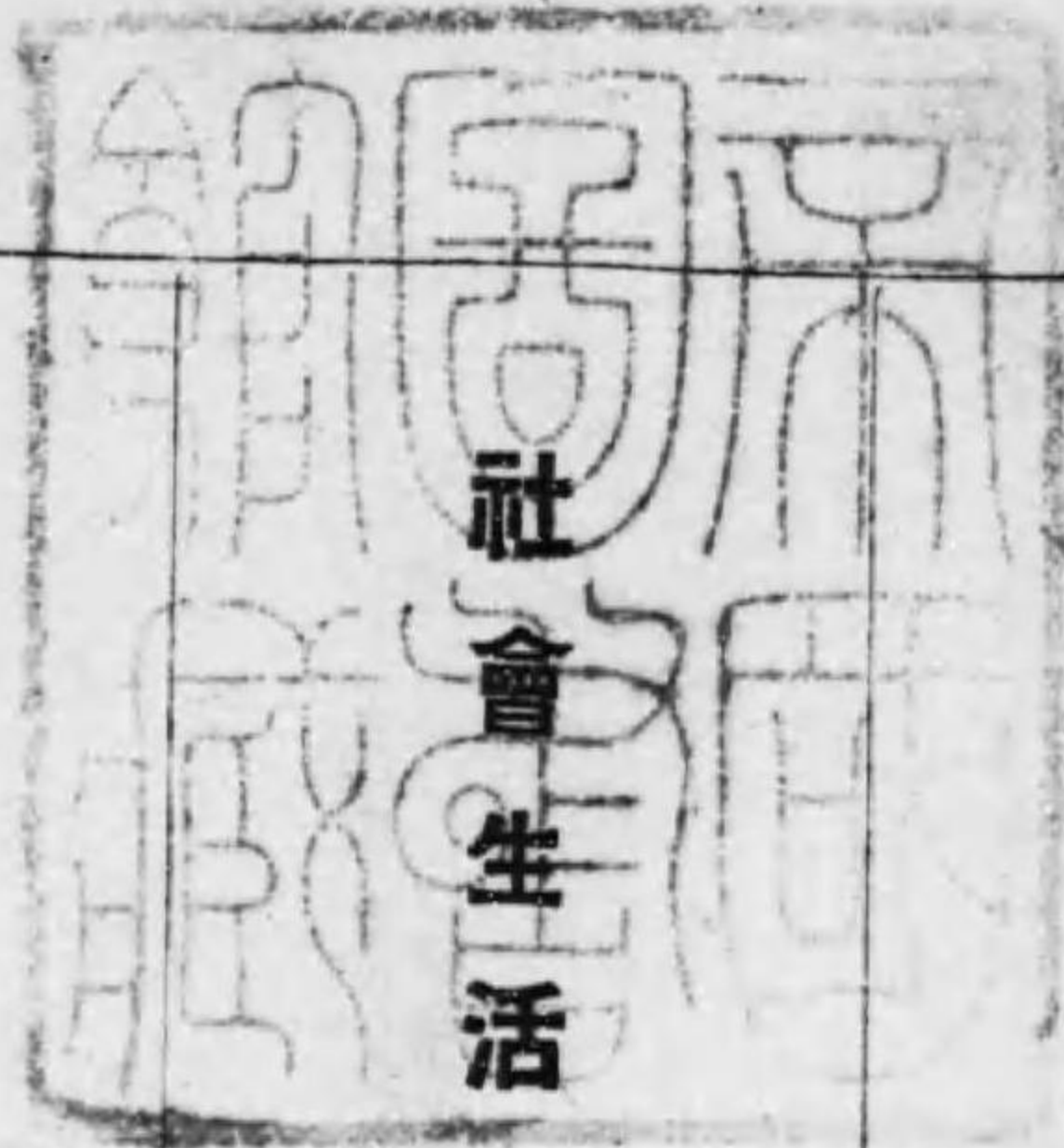
503
23

9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25

始



503-231



野村兼太郎著

社會生活と理想哲學

東京 下出書店



序

本書に収録するところは、大正九年七月以降、『三田學會雜誌』、『太陽』、『中央公論』、『解放』、『東京日々新聞』等に掲載したものである。然し全部修正を加へ一貫したものとしたのであるから、讀者は順次通讀せられんことを希望する。唯第一篇第二章、第二篇第一章の兩者は單に紹介に止まるものであるから、寧ろ省いて讀まれる方がいゝかも知れない。本書を構成して居る大多數の論文が主として通俗を旨とした諸雜誌に寄稿したものであるから、學術的研究としては不満の點が甚だ多い。又従つて繁簡宜しきを得てないところも少くない。書名を『社會生活と理想哲學』としたのは、是等の論文がすべてある理想的見地に立つて、社會生活を考察したものであるからである。若し本書から理想哲學に關する純粹の論究を求めらるゝ讀者があるとし

たなら、恐らく失望を免れないだらう。又社會生活そのものに就いても本書の語るところは極めて少ない。此の意味に於いて本書は純粹の學術論文ではない。然し余の前著「經濟的文化と哲學」に於いて考察せるものゝ必然的結果として社會對個人の問題を多少とも思考せざるを得なくなり、それ等の疑惑——社會と個人との關係如何、社會に於ける個人の地位及び意義如何等の問題に就いて先人の述ぶるところを辿り、斯くて諸雜誌の要求に従つて其の都度發表して來たものであつて、幾分なりとも是等の問題に解答を與へた積りである。

本書第一篇は大體に於いて余の立場を示すものである。因果律的必然性と目的論的必然性との兩種の必然性に關する究極の論究は本書には試みられてない。是等兩種の必然性が當然兩者以外のものに依つて一元的に歸一さるべきであると考へる。然し其の論證は未だ十分に熟して居な

い。偶然性に關する問題と共に他日に殘されたる疑問である。

第二篇の論述は特に机上の推論にのみ止むべきでない。常に確實なる歴史的研究と相俟つて論せらるべきものである。此の點に於いて余の前著第四篇「經濟的文化の發展」は極めて不十分なものではあるが本書の論述を補ふものである眞の結論は寧ろ今後に於ける歴史探求の中に存する。

第三篇個人の意義に於いて余は自己と云ふ個人を雜れることが出來ない。すべてのものが自己から出で、自己に歸する。自己を沒却し去ることとは余の如き者にとつては極めて困難である。アダム・スミス以降の個人主義的思索法は容易に棄て去るべきものでない。而して其の個人的な主觀的な判斷から普遍性を求めむること必ずしも不可能なことではあるまい。すべてのものに普遍性なしと考ふることはすでに其の論法自體が滑稽な矛盾を包含することは云ふ迄もない。吾人の個人的な主觀的な判斷

作用の中に何等かの普遍妥當性あることを證するには、カントの根本觀念に立入つて思索する必要がある。本書に述べるところは寧ろ實踐的方面である。先づ個人は如何にすべきやと云ふ問題の方が斯くすることは普遍性ありやと考ふるよりも、論理的には後に來たるべきものであるが吾人の社會生活にとつては直接であり卑近である。然し斯くすれば其の間に證明されざる間隙の存することは免れない。すべての個人が其の人格的價値を完成することに努力するのが、果してすべての價値行程に妥當であるか如何か。果して統一があるか如何か、即ち根本に於いてそれ等の問題を人格的價値完成と云ふ概念に安價に包攝せしめて居ると云ふ非難は免れない。然しこゝに現實の世界に於ける人間苦の根柢は存在するのではないのか。あらゆる矛盾も撞者もそこに其の端緒を發する。社會生活全般を考ふる時、吾人は普遍を豫想するし、自己の個々の生活を思ふ時、特殊を

前提とする。唯前にも述べたやうに余は現在に於いて自己を棄てることが出来ない。ゲーテがファウストの中で「痛まし。痛まし。強き拳もて、美しき世界を、汝毀ちぬ。世界は倒れ崩れぬ。半ば神なる人毀ちぬ。その屑を無のうちへ、我等負ひ行きつつ、失はれし美しさを歎く。下界の子のうちの力強き汝先より美しく、そを再び建立せよ。汝が胸のうちにそを建立せよ爽かなる目もて耳もて、新なる生の歩を始めよ。さらば新しき歌聞えむ」と實踐的尺度の根柢は胸のうち以外に何處に求めることが出来やうか。斯くして吾人は實在の世界が非實在の世界に一致せんことを求めつゝ進む。それ以上は我等の問題ではない。

最後に第四編に於いて余は斯くして個人の現世的實在に對して何人も其の生存を拒否すべき理由なく、却つて社會は是を保證すべき一組織であるかと考へ、あらゆる社會問題の基本として生存權に就いて概説した。然し

尙ほ其の實際問題としては殆ど觸れてない。僅かに其要求の理由を述べたに止まる。

以上述べたやうに本書に於いては尙ほ論究すべき多くの點を逸して居る。それ等の點に就いても今後尙ほ出来るだけ考へてゆきたいと思ふ。唯社會生活に於ける個人の地位を理想主義的立脚地より見て多少解釋を與へ得たとすれば本書の目的は足りるのである。必ずしも十分熟考した後筆を採つたものではないから、一層多くの誤謬を冒して居ることゝ思ふ。大方の叱正を得ば幸甚である。

大正十年十月十五日

野村兼太郎

目次

第一篇 社會觀……………一

第一章 二種の社會觀……………三

第二章 科學的社會觀……………三〇

第三章 社會發達の理想的要素……………八四

第二篇 社會と個人……………一一

第一章 社會組織と結婚制度……………一三

第二章 社會の強制力 上……………一六三

第三章 社會の強制力 下……………一九三

第三篇 個人の意義……………二二三

第一章 行動の倫理的歸趣……………二三五

第二章 犠牲の意義	二五三
第四篇 生存権の樹立	二七七
第一章 生存権の要求	二七九
第二章 人口論と生存権	二九五
第三章 結論	三三一

第一篇 社會觀

第一章 二種の社會觀

社會の變遷を觀察するに當つて各自に種々なる見地に立つことが出来る。自然科学的に價值觀念を否認し唯あるがまゝに社會を觀察することも出来る。又是と全然反對に目的を定め價值を肯定し、社會の發達を理想的に考察することも出来る。大體に於いてマルクス(Karl Marx)の所説は前者を代表し、文化主義は後者を代表するものと云へる。

マルクス主義とは如何なるものであるかに就いては、すでに多くの學者の説明し盡したところであつて、今さら詳細な論述は必要でないと思ふ。

然し乍ら唯推論の便宜上、簡單にマルクス主義は何を其の根本とするかに就いて略述しよう。

すでにマルクスと最も親密であつたエンゲルス (Frederick Engels) も指摘して居るやうに、マルクス説の根本は「唯物史觀論」と「餘剩價值説」とであつて、更に是等の説から推論して資本主義的生產制度の缺陷を暴露し、所謂「科學的社會主義」を樹立したことがマルクスの偉大なる功績の一つである。此のマルクス以後の社會主義を科學的であるとし、それ以前の社會主義、即ちサン・シモン (St. Simon)、フーリエ (Fourier)、オーエン (Owen) 等のそれを「空想的社會主義」として區別し、マルクスの學徒は甚だ是を誇とした。マルクスは物質的生活の生産方法が一般に社會的、政治的、及び精神的の生活を條件づけるとして居る必然の結果として、物質的生活が人類のすべての他の生活の根本となり、人類の意識が其の存在を決定するのではなくして、寧ろ之に反

して彼等の社會的存在が其の意識を決定するものであることになる。これ彼が社會全般の進化の根本に物質的要素の重要を認める其の唯物史觀論の要領である。更に彼が此の歴史觀の眼を轉じて現代の状態を觀察した時、それが労働價值説と共に、現在産業組織に於ける労働掠奪——餘剩價值論を生んだのである。彼の労働價值説は是を簡單に云へば、労働に依つて複生産することの出来る商品の價值は、すべて其の生産の爲めに、必要とせられる社會的労働の分量に依つて決定されると云ふにある。是以上こゝに一々解説する餘裕がない。(拙著「經濟的文化と哲學」第三編參照)斯くの如き労働價值説を稱ふる結果、現在の資本主義的生產組織に於いては労働のみに依つて生じ得る餘剩價值を、何等労働に依らずして不當に掠奪して居るものが存することになる。それは生産手段の私有を許して居る私有財産制度の必然の結果である。こゝに労働掠奪説を生じ、所謂マルクス、エン

ゲルスの科學的社會主義が勃興するに至つたのである。

マルクスが斯くの如き學說を主張するに至つたのは勿論種々なる影響を受けて居る。以下其の輪廓を示し、其の世界觀は如何なるものであるかを明かにし、更に是が簡單なる批評を試みようと思ふ。

二

上述したやうにマルクス主義の中心思想は大體に於いて唯物史觀論である。唯物史觀論は何もマルクスに依つて始めて發見された譯ではない。所謂通說に従へばマルクスはフイエルバッハ(Feuerbach)の唯物論に依つて、ヘーゲル(Hegel)の唯心論を打破したものであるとされて居る。然しボーナー(Bonar)もすでに指摘して居るやうに、マルクス、エンゲルスに依つて代表される科學的社會主義者の純粹なる學派はヘーゲルの哲學に其の基礎を

置いて居るのである。マルクスの「資本論」が公刊された當時、其の研究法が嚴密に現實的であるのに、其の表現法は獨逸理想主義の辯證論的であると云ふ批評を受けた。マルクスは是に對して、研究法と表現法とは全然別個の方法を採らなければならぬと云つて居る。而して前者が事實の嚴密なる研覈であることを必要とし、唯終局に於いてそれを表現するのは事物の生命が觀念の内に反映されるならば、我々が先天的構造を持つように見えるのであるとして居る。然し乍らマルクス自身は自己の辯證法はヘーゲルのそれと全然異なつて、全く正反對であるとして其の同一のものでないことを主張して居る。即ちヘーゲルにとつては觀念と云ふ名稱の下に獨立の主體として思想的體系を作成したもので、それが現實世界の創造主であつて、現實は唯思索行程の外的現象をなすに過ぎない。マルクスにとつては觀念等と云ふものは人間の頭腦の中で作り上げられた單なる物質

的事實に外ならないのである。即ちこゝに於いてマルクスがフイエールバフハの人類學的唯物論に依つて、ヘーゲルの唯心論を打破したのであると云はれるのである。けれども其のヘーゲル流の考へ方の影響を受けて居ることは、當時の殆ど大部分の思想家がさうであるやうに、否定することの出来ない事實である。

其の外マルクスに著しい影響を與へたを考へられるものはダーウキン(Darwin)の生物進化の説、サン・シモンの歴史の經濟的解釋、直接にはブルードン(Proudhon)の社會思想等であるが、更に彼が斯くの如き唯物論を稱へるに至つた原因としては、彼が猶太人であり、且つ故國の政府から屢々國外に追放されたと云ふ事實も亦算へなければならぬと思ふ。然し乍ら今是等の問題に就いて述べて居る餘裕がない。直ちに其の學説を追求して其の結果如何なる世界觀に到達するかに就いて論じよう。

マルクスの説はそれが科學的と云ふが如く、全然理想的觀念を排除せんと努めて居る。實際に於いてマルクス自身の生活が全然理想的觀念を缺如し、價值否定の生活であるとは、其の傳記に徴しても是を肯定することは出来ないが、少くとも彼の學説を徹底すればさう考へるより外はない。マルクスの云ふところに依れば社會組織の進化と云ふものは、常に生産力の變動に従つて生ずるのであるが、一度生産力が變化するとこゝに利害を異にする二個の階級が對立する。此の兩階級は新しく生じた生産組織に適應するが爲めに互に争闘するに至る。斯くして對立があつて進歩を生じ、歴史は次第に發展したのであると云つて居る。而して是等の發展はマルクスの説を徹底的に論究すれば、必然的に到達し得るものであつて、吾人々類は是に對して如何ともなし得ない筈でなければならぬ。所謂唯物論的定命主義である。故に吾人は資本主義制度を否とし、労働者側を是とし、

社會主義的生產組織を樹立すべき倫理的根據は全然無いのである。社會組織は自然に自ら發展する。吾人は唯是に従ひ是を促進し得る許りである。即ちある意味に於いて一種の樂天說であるとも云ひ得るのである。

今此の階級争闘に就いて考へて見よう。所謂マルクスの云ふやうに二つの階級が常に對立して居るとは考へられない。階級意識が其所得内容の相異——例へば企業若しくは資本に依る無勞所得と賃銀に依る勞働所得——に依つて發生するならば是等の對立が單なる反對であつて他の存在を許すものである以上、嚴密な意味に於いて社會に二つの階級對立すとは云ひ得ない。實際に於いて所謂中間階級なる第三者の存在を許すのは斯くの如き事實を語るものであらう。然し其の争闘を道德的に是認する^{と否とを問はず、兎に角大體に於いて歴史上常に二つの階級——社會的所得形成に於ける征服者階級と被征服者階級とが存在して居たことは事實}

といひ、認められる。又それ等の階級を包含した一つの國家と他の國家との間にも争闘が存在し、階級争闘のみを以つて人類の争闘史を記録することとは出来ない^{と云ふやうな反對があるにしても、古來の歴史を眺めるとある程度迄マルクスの云つて居ることは眞實である。貴族主義に對して起つた資本主義。資本主義に對抗する社會主義。事實大體に於いて利害相反する二個の階級が對立して、生産手段の變化と共に次第に支配階級の變化を生じて居る。此の際例へば資本主義を擁護せんと欲する資本家、若しくは資本主義を打破して新しい社會組織を形成しようとする所謂勞働者階級の何れをも善であるとする^{ことも出来ない}、惡であるとする^{ことも出来ない}。然るに吾人は往々にして是等の争闘に對して善惡の判断を下して居るのを見るのである。所謂マルクス主義者に依れば勞働者は一致團結して是等資本家の不當なる掠奪に對抗しなければならぬ}

うである。何が故に資本家が自己に最も都合好き現在の制度組織を維持するが爲めに努力するのが不當なる掠奪であるのか。雄蟻が其の職を果してしまつて不用になつた時に、働蟻が是を殺してしまふことが蟻の仲間
に於いて不當でないやうに、資本家が労働者を酷使しても差問へないとき
れないのか。若し人間があらゆる他の動植物と同様に全然生物的唯物的
にのみ行動するものであつて、道德等と云ふものは其の當時の支配者階級
に最も便宜であるとか考へられる法則と見做されるとしたならば、吾人は所
謂社會改良の諸運動、労働者の解放等の種々なる行動に対して善として是
に賛成するのを躊躇しなればならない。然るに吾人が現在に於ける資
本家の行動を不當なる掠奪であるとする所以は何であらうか。そは多数
なる労働者の利益を少数なる資本家が壟斷するからであるとか云ふ。然ら
ば何が故に少数者が多数者を壓迫してはならないのか。且つ又過去に於

ても同じく労働者の數は資本家の數よりも多くはなかつたのか。奴隸は
貴族よりも數が多かつたらう。然るに何等の争鬭も起らなかつたことが
あつたのは何が故であらう。蓋しそれ等多數者が未だ自己の人格を自覺
しなかつた爲である。否生産手段が未だ十分に發達しなかつたことが其
の根本である。唯物論者は云ふかも知れない。一步譲つて生産手段の發
達しなかつた爲めであるとしよう。然し何が斯く生産手段を發達させた
のであらうか。吾人は着るに困つて現在のやうな服装を作つたのであら
うか。其の他すべての機械、電氣、瓦斯等は盡く窮餘の一策から案じだした
ものであらうか。唯物論者の云ふが如く恰も饑餓に驅られた動物が食物
を得んとして多大の努力に依つて獲得した技能が、其の動物に一の進化を
齎したと考へるやうに、人類のすべての文化的成果も亦斯くの如きもので
あるとなすことが出来るだらうか。勿論人間も一の生物である以上さう

した種類の影響を蒙ることを免れないが、蜂が常に同一の生産手段で満足して居るやうに、人間も亦同一の生産手段で満足して居なかつたのは何が故であらうか。何等か他の動植物と異なつた點があるからであるまいか。更に前述した倫理的價值判斷に就いても亦人間の生活に他の生物と異なつた價値的生活があると云ひ得る。一々詳細に論述するのは暫く後に譲つて、こゝには直ちに吾人の生活そのものに就いて觀察しよう。(第二篇参照)

三

前にも述べたやうに人間も一の生物である以上、周囲の状態に應化してゆくことが必要である。然し乍ら人間の應化は暗中に住む鰻の一種が其の生活に順應するが爲めに、不用の眼を失ふやうな應化のみではない。資本家階級から酷使される労働者が其の壓迫に耐へ得るやうに順應許りし

て居るであらうか。こゝに労働者が資本家に對して反抗せんするのは即ち労働者階級の自覺に基くものではあるまいか。

人間が一の生物であつて其の本能的な生活として自己の生命を持続しようとするのは、あらゆる他の生物と少しも變らない。同じく自己の生命を犯さんとするものがあれば、極力是を拒否しようとする。又吾人のすべての本能は最もよく其の生命を維持するに預つて有力である。例へば孩兒の母乳を巧みに吸入するが如きは其の適例である。然し乍ら吾人の生活は單に斯くの如き衝動的な本能生活許りではない。此の本能的な世界にあつては吾人は殆ど外界の支配にのみ左右されるだらう。晴れ、ば外に出て食物獲得のために働き、雨が降れば巢に歸つて休む。假令同族であつたとしても役に立たなくなれば遠慮なく殺してしまふだらう。さうした生活以上に出づることは少しもない生活、ある意味に於いて不安のない幸福

な世界であるとも云へるだらう。然るに吾人が不安を感じたり、現在の生活に對して不平不満であるのは何が故であらうか。即ち現在の生活に對してある種の價值判斷を下すからである。吾人が心に不安を感じるの、ある場合には現在なし、ついある生活に於いて、自己の價值が不當に評價されて居ると感ずるからである。而して現在の制度に、不平不満を感ずるの、は少くとも將來に於いて或理想の實現を期待するからである。斯くの如く吾人が理想を抱懷する所以のものは、吾人に他の生物と違つた一つの生活があるからである。若しマルクス主義者のやうに考へるならば、現在の文化の所産は蜂の巢、蜘蛛の網と同様でなければならぬ。然し一體彼等が是等の文化的所産が物質的本能的產物に過ぎないと云ふ斷定を下したのは何に依つてであらうか。斯く判斷するものも亦一の本能に外ならないのであらうか。斯く考へて見ても何かあるものゝ存在が其處に許さ

れなければならぬだらう。

あるものとは何であらうか。それは人間の他の生活でなければならぬ。即ち吾人が自己の自由意思を以てすべてのものを觀察し、其の自己の天賦の才能を出來得る限り發揮して自己を主張せんと欲する價值の世界である。此の世界に於いては吾人は常にある理想を終局の目的として考へる。而して其の理想に到達せんとして努力するのである。吾人は此の理想を文化價值の完成であると思惟する。此の文化價值は吾人が不斷に自己の天賦の才能を十分に發揮せんとすることに依つてのみ到達され得る。斯くの如き文化價值を絶えず創造して行かうとするところに、吾人のすべての價值判斷は其の基準を發見することが出来る。而して是に依つて一步步努力し、精進してゆかなければならぬのである。

斯くの如く人類社會の發達を考察するのは、所謂マルクス主義者の世界

觀と全然別個の觀察を下すものである。以下少しく斯くの如き世界觀に就いて論じよう。

四

先づ吾人々類の生活上の行動は如何にして此の文化價值に係はるのであらうか。若し吾人の生活が衝動的な本能生活のみであつたならば、所謂自然科学的因果律に依つて、十分周囲の事情を正確精密に觀察しさへすれば、其の將來に於ける生活をかなり確實に豫測することが出来る筈である。然し吾人には自由[○]思の生活がある。此の生活を規定するものは斯くの如き因果律ではない。だが全然無規範のものでもない。放恣^{ワイルド}の生活とは全然區別されなければならぬ。吾人が或行動をなすに當つて其の規準となるべきものは、既に前述したるが如く、文化價值である。若し吾人が最

も文化價值に對して正當である、行爲をするならば、其の行動の全體は、一つの價值づけの過程として採らざるべからざる道程を辿るものである。例へば小説家がある創作に従事するとする。其の小説家が持つて居る材料を如何に取扱ふとも彼自身の勝手である。悲劇にしようかと、喜決にしようかとそれは彼の見地に依つて如何やうともなし得よう。けれどもそれが何れであつても、苟も其の作品が完成されたものであるならば、換言すればそれが文化價值に叶ふものであるならば、其の材料を一の作品に創造してゆく過程に於いて何等かの必然性があり得る。是は亦直ちに吾人の生活に對して適用することが出来よう。各人は種々なる異なつた天賦の才能を持つて居る。其の才能を十分に發揮しようとしまいと、又政治家にならうと學者にならうと實業家にならうと、それは各人の勝手である。(云ふ迄もないが今日の制度に於いては、斯くの如き自由さへ十分に各人すべてに與

へられて居るわけではない。尙ほ此のことに就いては後に述べる。然し乍ら若しも吾人が自己の天賦の才能をば十分に發揮せしむる、換言すれば文化價値に最も貢獻あるやうに生活しようとするならば、自ら其處に一定の行程がある筈である。然し乍ら人間の下す判断は先づ其の經驗から歸納するのが普通である。然るに經驗によると云ふことは誤があり得ると云ふも同様である。従つてある場合——寧ろ多くの場合に、自己の才能を無視して、文化價値に對して寄與することが少ない場合があり得る。然し又誤があり得ると云ふことが、更に一層吾人をして努力せしむる所以ともなり得るのである。

以上論じて來たところに依つて見ても明かなるが如く、吾人は各自に其の才能を十分に發揮すること、換言すれば各自の個々の價値完成に努力し得ることが其の理想である。而して斯くの如き個々別々の價値完成を歸

一統一するものとしてこゝに先天的なる文化價値の觀念を基本とするのである。吾人のあらゆる行動が倫理的に善であると判断されるのは、唯斯くの如き文化價値に對して多少とも貢獻しつゝありや否やと云ふことに依つて決定される。而して少くとも吾人が目して理想的の社會であるとするとそのものは、斯くの如き文化價値の建設に、各人が其の自由意思に依つて努力し得るものでなければならぬ。

以上二個の世界觀を比較する時、前者が價値否定の Sein の社會觀察であり、後者が價値肯定の Sollen の社會考察であることは明かであらう。最後に現在の資本主義的社會組織を考察するに當つて是等の二種の世界觀が如何なる地位を占めるかに就いて簡單に述べやう。

五

以上述べたやうにマルクス主義的世界觀の缺點は此の人類社會を單に機械的に因果的に觀察して全然沒價值なる唯物論的定命主義に墮したと云ふ點にある。然し乍ら假令それ等の點はあるとしてもマルクス主義は現在に於いて容易に破棄すべきものではない。以下其の理由を述べよう。

前述したやうに吾人々類の生活には文化價値の建設に對して努力する方面があるが、通常斯くの如き努力をなし得る前提には云ふ迄もなく生存を必要とする。勿論ある場合には例へば基督のやうに生命を棄て、より高き文化價値に參與することがあり得る。然し通常一般人を社會全般として觀察する時には先づ生命維持を第一としなければならぬ。加ふるに既に前述したやうに、人類の本能的な生活に於いて最も強烈であるのは生存欲である。すでに何等價値完成に貢獻し得ないやうな老人でも廢疾不具の者でも、尚ほ生きんと欲する事實は屢々實見するところである。かく

生存せんとするには先づ物質的獲得を必要とする。即ち衣食住に要する物質はすべて生命を保持することを終局の目的とする。斯くの如き物質的獲得と云ふことが社會全般の變化に最も至大なる影響を與へるのは必然の結果である。従つてマルクスの云ふが如く其の經濟的構造が基本となつて法律上及び政治上の上層建築が構成されるのである。こゝに於いてあらゆる文化價値建設の前提として、先づ各人の生命維持に對する保證を與へることが第一の要件である。即ち言ひ換へれば生存權の確立にある。勿論後に述ぶるが如く生存したいと云ふ欲求が直ちに生存權の要求とはなり得ないが、アントン・メンガー (Anton Menger) も云ふやうに、生存權要求の重要な論據とはなり得る。

暫く現在の社會狀態を觀察して見よう。現在は所謂資本主義的生產組織の下にあつて、私有財産制度と所謂契約の自由、營業の自由と稱する美名

の下に於ける自由競争とを認めて居る時代である。此の制度の下に於いて各人は果して生存權を認められて居るだらうか。くどくしく論ずる迄もない。物を尊重し、従つて貨幣を尊ぶ資本主義的精神の當然の結果として、人を輕んじて人格を無視し、貨幣を所有しない者は殆ど人としての待遇を受けて居ない。況んや生存權の認められようわけがない。かく自己の生命維持をすら保證されず、而も單に遊逸安惰な生活をして認められないのではなく、一日營々として勞働し、而も無資産なるが故に生活を保證されないのである。然るに他方資産を所有して居る階級の者は、よしんば遊樂を事として居たとしても、其の生活は極めて安全である。此の點に於いては少くとも現在の資本主義的制度は、前述せる如く各人の價值完成を十分に行ひ得ることが文化價值建設に最も叶ふものであるとするならば、不適當なる社會組織であると云はざるを得ない。こゝに於いてマルクスの

所謂勞働價值説及びそれより生ずる餘剩價值論が假令理論上幾多の缺陷があるとしても、其の資本主義制度の弊害を適切に明示した點に於いて最も意義の多いものである。かくて文化價值の觀念より始めて始めて少數なる資本家が多數の勞働者の利益を壟斷することが不當であると云ひ得るのである。

以上述べて來たやうに現在の社會組織に於いて、最も多くの人が不安に感ずることは其の生活が保證されて居ないと云ふことである。働いても人間らしい生活が獲得されないと云ふ點にある。所謂道德の腐敗も此の點から生ずる。吾人は財を取得しない限り生活の保證は得られないのであるから、如何なる手段に依つても財、換言すれば貨幣を獲得しようとする。其の爲めには詐欺偽瞞等の手段もそれが法律に觸れない限り行ふことを躊躇するものではない。況んや他人の生活問題等をば顧慮する暇があり

得ようか。現代の罪惡も亦此の點から發する。他人の財産を破損すれば直ちに處罰されるが、其の人格を傷けても容易に罪されることがない。少しく眼を開いて現代を観察すれば至るところに矛盾あり、撞著あり、殆ど其の向ふところを解し難いやうに見える。然し是はあらゆる過渡期に於ける當然の状態である。吾人は現在に於いて文化價值を確立する前提として、先づ第一に生命の持續に對する不安を除くが爲めに、すべての人類の生存權が認めらるゝことを希望するのである。

然し乍ら生存權の確立に依つて、あらゆる人類の不安が一掃されるわけではない。吾人が如何にせば最もよく自己の價值完成を成就し得るや、又は其の他の種々なる精神的焦慮を體驗するだらう。かくて吾人々類は永遠の平和を求めつゝ、永遠に文化價值の完成に戰はなければならぬかも知れない。それは文化價值の完成を目的とすると云ふも、要するに不完全

なる各人の體驗に依る各自の價值完成に基いて居るからである。然し乍らシェークスピア(Shakespeare)、ゲーテ(Geethe)等がすでに立派な作品を残した以上、最早それ以下の人間が文學を希望する必要を失ふわけではない。シェークスピアはシェークスピアとしての價值完成を行つたのである。それ以下の文學的才能を有する者と雖も、彼自身の最も適當したる價值完成を行ふとするならば、そこに絶大なる價值を生ずる。此の意味に於いて、人類は永遠に不安を感じ、永遠に戰ふと云ひ得るのである。尙ほ是等の點に關しては後章に論述しやう。

唯吾人が當面の問題とすべきものは先づ生存權の確立である。各人すべてに生存權が認められない限り、マルクス主義者の云ふが如く、其の所得内容の相違から常に利害相反する二つの階級の對立争闘を生じ、それから生ずる社會的不安を免れることが出來ないだらう。假りに勞働者階級即

も第四階級が資本家階級を倒して勝利を得たとしても、若し彼等の組織する社會制度にしてすべての人間に自由なる生存權を認めないとしたならば、恐らくこゝに新しい第五階級が発生して、それ等が自覺すると共に又々新しい争闘を惹起するだらう。而して社會は斯くの如き生存の不安に依つて又もや惱まされることであらう。若しさうであるとすれば、假令マルクス主義的社會觀が没價值的に社會を観察したものであつて、誤れる一面的の觀察であるとしても、其の生命は更に一層持續されるであらう。吾人は未だ斯くの如き考察から學ぶべきところが甚だ多い。吾人の目指すところは文化價値の完成であるが、先づ其の爲めにマルクス主義の洗禮を受ける必要がある。マルクスを徑たる後のカントに歸るべきである。

以上述べたる二個の社會觀を見る時、何れも一面の眞理を捕へたものであるが、吾人の立脚する立場は畧々上述したところに依つて明かになつたと思ふ。尙ほ其の理想的要素に就いては第三章に於いて詳述しやう。こゝには唯没價值的なマルクス主義から文化價値の觀念を理想とする思想に向ふべき所以を述ぶるに止める。

第二章 科學的社會觀

一

第一章に於いて畧述した二種の社會觀以外に、更に純粹に人間文化の發達即ち歴史を科學的に觀察しようと思つて企てる者がある。斯くの如き社會觀が果して妥當であるか如何かは各自の採るべき見地に從つて相違するものである。こゝには唯社會發達に對して斯くの如き考察も下し得ると云ふ一例として紹介しようと思ふ許りである。斯くの如き觀察を下す者に米國の社會學者として著名なるフランクリン・ギイディングスがある。以下全氏が“Political Science Quarterly”第三十五卷第四號に掲載した「歴史學說」

“A History of History.”の自由譯に依つて其の大約を窺はよと思ふ。社會が果して斯くの如く變遷し、斯くの如く終熄するものであるか如何かは暫く讀者の考に任せて置く。

二

かの有名な「死の書」“The Book of the Dead.”が編纂されない以前に、すでに多くの歴史に關する學說が存在して居た。此の書の表題がすでにそのことを暗示して居る。是は此のことよりは疑はしいことではあるが、恐らく吾人アダムの家族が忘れられてしまつた後と雖も歴史學說は存するだらう。フリードリッヒ・ヘーゲルやカール・マルクスの知的遺物が灰になつてしまつた後でも、尙ほ廣汎なる(而して尤もらしき)歴史哲學が存在することはあり得べきことである。

思索は峻刻である。そして多少心目を牽く。然し利益がない。歴史學說の數は殆ど歴史家の數程澤山ある。それ等の史的性質は殆どそれ等が記録の事實であると云ふことに存して居るが、歴史學說が知的内容を有する限り、歴史と云ふよりも哲學である。而して重なるものは哲學者に依つて發達させられたので、歴史家に依つてははない。勿論理由は簡單である。第一に歴史は事實の詳説であり、具體的なものであるからである。第二に歴史學說は一般化である。一般的狀況や形勢を描寫する。斯くして哲學ともなり、又幸か不幸か社會學ともなる。

故に無遠慮な社會學者が更に一般化して、歴史學說を個別的にではなく、一般に種類若しくは典型に依つて研究したとしても別段差聞はないだらう。

プラトーからコムト、コムトからアダムス兄弟に至る迄、歴史學說は五つ

に類別することが出来るだらう。

第一の種類には神學其の他の形而上學者の定命的哲學を含む。

第二の種類は社會的自決の哲學である。プラトーの見解は以上兩者の中間にある。一方に於いて神が人事を處理し、他の一方に於いて人類が自由に計畫し自由に成就する。

第三の種類は地理的若しくは環境的影響に基くものである。モンテスキューの著作はその古典的なものである。更にエレン・シイ・セムブルやエルスウオース・ハンティングトンのやうな今日の學者の勞多き著作は更に實質的である。

第四の種類は學說は歴史を傳。襲。産(遺傳ではない)と云ふ言葉で説明しようとするものである。傳襲産と云ふのは吾人が現在享樂する人類活動の全産物及び副産物のすべてである。即ち吾人の習慣(その本來の本能的

性質と區別して吾人の技術、吾人の知識及び財産を包含する。是等の傳襲産、即ち歴史は恰も河が砂土を洗ふ時にするやうに曲りくねつた河路を切り開いてゆく。コムト、バツクル及びカール・マルクス等は全然似ては居ないが、歴史を傳襲産てふ言葉を以つて解釋した。コムトは人類は形而上的に依る神學的のものから實證的な若しくは科學的な知的習慣に移るものと見た。バツクルは地理及び風土に於ける歴史の歴史の原始的な解釋を過去及び現代の第二次的、若しくは文化的な環境を以つて正さうとした。マルクスの唯物史觀はその爲めに生じた誤れる誇大なものとはなつたが、道徳に於いても物質的である。社會的に組織せる人間に起つたこと、若しくは起り得るすべてのことを財産の聚合や作用に歸するのも一つの試である。

第五のそして最後の歴史哲學は近世のものである。是等は宇宙の動物ダイナミクス

の書からのものである。それは人間經驗の流を太陽系や雷雨を説明する場合の如く説明する。ハーバート・スペンサーやブルツクス・アダムスは空想を容るることなく物理的エネルギーの減少に分解する。生物學者や人類學者は歴史を遺傳と自然淘汰として見る。物理學及び生物學を許容するなら、人類の歴史は心理的或ひは作用的平衡 (equilibration) であると云へるだらう。

斯くの如き議論の前提となるものは新しいものではない。現代の風潮は是を否定し、蔑視する。其の前提は人類は平等に生れるものでもなく、又時間の始から存在して居たものではないと云ふことである。恰も熱エネルギーが空間に平等に分布されてなく、而してそれが爲めに活潑な運動の分子から鈍い運動の分子に放射するやうに、肉體的活力も種族の間に平等に分布されて居ない。それが故にあるものは没落するか虚弱を忍んで生

存する。又刺激に對する行動的反動はそれが本能的たると理性的たると、或ひは又衝動的たると先見的たるとを問はず、更に活潑となり疲れず、更に複雑となり、更に適化し、人類のある聚合に於けるよりも更によくある聚合の部分に於いて相關聯する。而して是が故に實際の活動は活潑なる人口、活潑なる合成團體、活潑なる組織階級から、鈍き人口、鈍き團體、鈍き階級に零れてゆく。流動が始まつた時に歴史が始り、それが終ると歴史も終る。

此の學説が他の歴史學説よりも純粹科學として明瞭であるか如何かは確かではない。然し若し明瞭なることが事實であるなら、若しくは事實である限り、その爲めに得られる實證的價値を有する。現在に於いて世界は知的にも困亂して居るし、道德的にも粉雜を極めて居る。すべての人類の假定的平等の下に社會を改造しようとして居るが、若しそれが成功するならば、原始からの歴史的事業を破壊するだらうし、人類を滅亡に歸せしめるだらう。

三

歴史は一種の劇である。各人の情熱が野蠻に或ひは知的に、他の各々と人生の舞臺で争闘する。更にそれ以上に歴史は吾人の認識力を超越した恐るべき大なる創造的努力である。又吾人の一定の村度能力を押し去るやうな大事業でもある。而して又歴史は常に各時代の子供にも大人にも興味を持たせる物語である。すべてのよき物語と同じやうに中途から始まる。即ち人類がすでに永く生活し、彼等の行爲を書き得るやうになつた時に始まる。吾人の現在の知識の限度に於いてはエジプト及びバビロニアのズンメル(Sumer)を以つて始とする。

然し乍ら又すべてのよき物語のやうに歴史の序言が書かれる時には、其

の以前に及ぶ。彼等の以前の職業、知識、彼等の興味、彼等の合同及び遍歴、並びに如何して彼等を知り得るやうになつたか等のことに就いて多少とも説明する。歴史の物語に於ける此の章を今日では歴史以前と稱する。此の時代は別段記録が残つて居ない。それに關する材料は地理學と生物學、人類學と考古學とから求めなければならぬ。

四

其の最初、熱帯の森林に物を投げ安全な地位から敵を攻撃することを知つて居た猿^{モンキー}が居た。やがて今のゴリラやチンパンジーより大きく、もう少し利口な猿^{チン}が居るやうになつた。彼等は殆ど直立することが出来、棍棒と投石とを以つて闘つた。彼等は其の子供達の爲めに茅屋を作ることが出来、地上を歩き廻ることを恐れない。彼等の骨は遠く印度から西南歐羅巴に

發見される。現に吾人は第三紀層の瓜哇で猿人 *Pithecanthropus Erectus* を發見する。是は猿のやうに野蠻で、そして比較的解剖學者が *homo sapiens* であるか如何かと疑つた程人間に似て居る。兎に角是は人間と其の祖先との間に存する一つの「聯關」である。最早や缺けては居ない。

次ぎに骨がある——それは單なる骨だが吾人の空想を刺激する。ハイデルベルヒの顎、ビルトダウンの頭蓋、ネアンダアールの頭蓋——是等は人間の遺物である。是に就いては疑ない。そして是等の系列が次第に猿の痕跡を失つて、十萬年の間に吾人が現在屬して居る人間の種族が次第に出現する有様を示して呉れる。

此の點から吾人は初期の人間の作つた物、其の技術品、即ち武器、道具、什器並びに是等のものを作り、残してゐつた場所に就いて觀察する。最初に其の配偶と子供及び兄弟姉妹、並びに兄弟姉妹達の配偶と子供等と共に森の

中、河の畔に住む。丁度今日アンダマン島、亞弗利加、ブラジル等に於いて見られるやうな數多の小さな群落をなして居た。さもなければ濠洲人やブツシユ人のするやうに叢の間を流浪した。彼等は狩獵と漁獵とをなし、ゴリラのそれと大差ないやうな小屋を作る。矢や槍の先には無雜作に削つた石をつける。彼等は削つた樹皮の蔭や、柳や蘆の籠を編む。

彼等は廣く散布して亞細亞や歐羅巴の北部にも居た。推量するに彼等は氷河時代の溫和な天候の下に亞熱帶の動物と共に彼等の途を切開いたのであらう。南方に來たれる新らしい氷河が彼等を襲つたので、彼等は退去した。多くは死に僅かに生殘つた。彼等は南歐羅巴の穴の中に避難した。以前削いだ石を打ち合せて火を得ることを知り、長い間此の穴に住んで居た。彼等は石の斧や槌、骨の針を作つた。獸皮を着た。象牙に彫つた。彼等は畫くことを學び、穴の壁に現實的な、而も美しい繪を畫いた。穴熊、銳

い牙の虎 (sabretoothed tiger) 彼等の恐れたマストドン(象に似たる第三紀産の巨獸及び彼等の支柱たる馴鹿を描いた。是等は古石期時代の著名なる人類である。

他の場所北亞弗利加、西南亞細亞に於いては古代人は石器時代新部のものになる。彼等は其の石の器具を磨く。粘土を以つて陶器を作り、其の上に刻んだ線の中に石膏をすり込み、それで幾何學作圖を施したりする。時代は更に經過すると手の労働で土地を耕すようになる。彼等は樹木を丸太になし、それを以つて柱や材や梁や板を作る。彼等は住むべき家を作る。土の中に柱を打込んで、水の中に材を立て、其の上に床を張り、様式を行つて然る後家を建てる。彼等は丸木橋や小舟を作る。時代は再び經過する。亞弗利加や亞刺比亞、西部亞細亞や東部歐羅巴の草原に山羊や羊の群を看視して居る人類が現れる。亞弗利加、亞刺比亞、カスピ海の東、中央亞細

亞等の沃地に樹木、石、乾いた粘土、等様な材料で作られた家が建つ。家畜の庇護所、水の満ちた濠、水槽や井戸、穀物小屋、注意して保持されて居る火、儀式を行ふ秘密な場所等が発見されるだらう。

多くの時代が過ぎて行つた。北亞弗利加を通じて、中央及び南亞細亞を通じて、中央及び南歐羅巴を通じて人類は村落に及び小さな町に住んで居た。是等はユーフラアト河やナイル河に沿ふて數珠のやうに列んだ。古代の檜、松等のドロイド的(古ゴール、ブリトンのケルト人間に存して居た魔術的僧侶の背景に對して、連山の麓の靜な谷の間に彼等は隠れて居た。岩の背に蓋はれてすさまじい荒原の嵐を物ともしなかつた。柱で支へられて居る床の上に彼等は瑞西や伊太利の湖水の中に生活して居た。若しくは乾燥した土地ではあるが、其の周圍には濠があり、——不思議にも湖と同じ構造のところに住んでゐた。是はすべての種々なる状態の下で彼等は

豕や山羊や其の他の家畜を養ひ、耕作を行つた。身分や仕事の分割——即ち社會的、職業的、分業が見られる。共同團體(a community)の人々が最早すべて同じ階級の者ではない。例へば住居に就いても屢々二個の相接近した村落から存立する。一つは優秀な村落であつて、其の周圍の土地を所有し支配する人々が住む。他の一つは劣等な村落であつて、他國人(alien)が住む。即ち戦争に依つて撲滅された人々、若しくは其の元の種族から犯罪人として追はれた人々、——是等の人々の雜多なる集合である。彼等は征服された者である。命ぜられた仕事をなすと云ふ條件の下で、居住することを許され、保護され、土地が配與されたのである。是等は所謂村落共同體(village community)である。經濟史家は是を描いて自由な田園的な共產的な民主政體であると云ふ。

各住居の附近に其の墓所がある。長形か若しくは圓形の塚が普通であ

るが、時には凹んだ石の塚であることもあつた。それは恐らく古代人の死骸の横つて居た穴の模倣であつたらう。上部に重い楣を支へて居る二つの切つてない柱が門をなして居る。又更に印象的な巨石の記念碑がベルシャ灣から西南英蘭の間、其處此處に存在して居る。巨大な柱の道路やストーンヘンジ(Stonehenge)は英蘭 Wiltshire にある有名な古代の遺物のやうな大きな圓形の圍等がある。大方是等は祭の行列や競技の際に使つたものであらう。(Breasted:—Ancient Times, p. 28.)

更に最後の光景を以つて歴史以前のフキルムは終を告げる。山や谷に住める人々が銅を又ある所では錫を掘り出した。夜空に對してなす閃光は彼等がそれ等の金屬を粗末な土の垣塙の中で混合し鎔解して居る場所を密告する。今や彼等は青銅を作りつゝある。斯くして人類の種族は地球上に擴がつた。

五

所謂有史時代の歴史はそれ以前に比較すれば、短くはあるが複雑多様である。従つて吾人は細節に觸れずに概観しなければならぬ。

ナイル河の三角洲及び其の沿岸、ベルシャ灣頭及びユーフラート沿岸に人口が密集した。是等の人口は一の密接な種族許りではないアリヤン族は土人と混合して、種々な言葉が聞かれた。農業は系統的となり、産業は特殊化された。驚くべき技術を有つた美術家が有用品を作り、金銀寶石を以つて美しい模様の色どつた。技師は堤や貯水地や運河を作つて、河の氾濫を調節した。天才の建築家が偉人の爲めに宮殿を、神と民衆との爲めに寺院を、尊敬すべき故人の爲めに墓を作つた。舟が河を往復した。町であつた所も今や人間生活の混沌たる都市となつた。商人が沙漠を横切つて外

國と隊商に依つて貨物の輸出入を企てた。奴隸は茅屋に育ち、石山や煉瓦製造所に働いて死ぬ。書史が月日や租税を録して王朝の記録を保つ。是等東南地中海地方の河畔に住んで居る稍々進化した人々が文明を作つてゆく。植民、流罪者及び商人が是を遠い東方に擴め、商人と軍隊とが西部邊疆迄に及ぼした。

クリートの島々に於いてクノソスはすでに古く、確乎としてエーゲ海を支配して居た。其の下は崩壊物の地層であつて、それは石器時代新部の燒物師や初期、中期、後期のミノア人に依つて殘されたものである。其の周圍にはそれが支配するそれより小さな、然し富める町々があつた。エーゲ島には多くの小港があり、希臘の海岸には植民地がある。即ちアルゴス灣頭のテイリンス及びテイリンスからコリントに至る山路に當るミセネエ等である。此の海上の勢力の驚くべき富、其の青銅や金は完全なる美術品や

エジプト、亞細亞及び西部亞弗利加と歐羅巴との海岸の貿易に費された。其の商船は航行の際、又は港々でも戦争船——最初の海上の勢力——に依つて保護された。此の中央東部地中海地方の光輝ある文明に對してエジプトや亞細亞の軍隊は何等侵すところなかつた。

黒海と地中海との間、タウルス山とカウカサス山との間、ザグロス山とカスピ海との間に、カバドシヤとアルメニア及びメディアとエラムの臺地が東方ベルシヤ、更に遠くまで擴がつて居る。エジプトやテイグリス、ユーフラート流域の軍隊が隊商の路を辿り、水路を上り、峡谷山路を徑て侵入して來た。エラムやメディアから、今やベルシヤからもアリヤン民族が出現して來て、其の帝國を迅速に擴張した。カバドシヤと東部小亞細亞を通じて非アリヤン民族が軍隊的勢力として現れた。ベルシヤ人はユーフラート人に勝ち、ヒチット人はエジプト帝國の領土の一部を征服して、各自一部傳

來の、一部獨創の文明を樹立した。西部亞細亞高地の是等の文明は強固な偏したものであるが、擴つて居た。ペルシヤは西北印度に於けるアリヤンの勢力を驅逐した。ヒッタットの勢力は西部のアリヤン族にもズンマア族やセミ族の影響を與へた。

エーゲ海及びアドリアチック海を圍む三つの半島が地中海の北部に突出して居る。即ち小亞細亞とペロポネソスと希臘及び伊太利である。是等の東北、北、北西はアリヤン族の分散した地方である。山や岳が谷や平原を圍んで海に面して居る。低い坂には橄欖や葡萄が、高い部分には栗や櫟が生じ、海岸は不規則で、入江や灣があつたり、長い一直線の區域もある。希臘と小亞細亞との間で海上にエーゲ島が見える。海は(アガメノン以來)印象派的な紫である。丘でも平原でも日中太陽は白色を呈す、然し朝夕の光は董色である。美は此の時特に發揮される。孤獨と海とを恐れない人

々も美には感じ易く、自由を愛する。牧人、百姓、漁夫、水夫及び今は技術家や商人も加はる。河谷地方の人々に比較すれば、彼等は人口も少く、貧乏である。彼等の都はトロイを除いて餘り榮へて居ない。其の建物もテベスやバビロンに較べると遙かに貧弱ではあるが、知的である。其の彫刻や繪畫も型や線を自由に驅使して、以つて眞實に到達したものである。種族として彼等は原始的の地中海種族(Mediterraneans)ダニユーブ族(Danubian)の侵入者とアルプ族(Alpines)との混血であるが、奴隸は雜種に限られ、貴族的なスバルタに於けるより民主的なアテネに於けるやうな状態であつたらしい。彼等の軍隊は少數で地方的であるが、勇敢であつた。アテネの海軍は驚くべき勢力であつた。東部は歐羅巴希臘の侵入に失敗した。又カルタゴは伊太利に侵入したが驅逐された。是等は北地中海地方の半島文明の著しい特徴である。アテネは是を帝國的に作らうとして不成功に終つた。マ

セドンは成功したが其の帝國は短命だつた。羅馬はラインとダニユーブ兩河の南部歐羅巴、東北亞弗利加及び小亞細亞に亘る帝國を建設した。軍隊動員の爲め又交通の爲めに用意された立派な道路は以前のものとは比較にならない。あゝちは橋や水道に應用され、其の爲めに町の住民は淨水を多量に受けることが出來た。此の帝國は約五百年持續した。

羅馬及び其の領土の羅馬化された住民、地中海族、ダニユーブ族及びアルプ族の雜種は歐羅巴ノルド族、特にバルト族に蹂躪された。彼等の多くは森林の内地人であつた。彼等は建築に木材を使用し、石材を用ひない。工學や美術に關する知識は全く缺如して居た。侵入者として彼等は燒失したり破壊したりした。君主制度を樹立して現存せる奴隸制度を改造し、更に擴張し義務的奉仕を増加した舊制度の美術家の援助教導に依り、傳統と技術を模倣して嚴然たる城廓を建設した。羅馬化された基督教に改宗し、

教會や僧院を建てた。教會や城廓の周圍に職人労働者の町を生じたが、商人は少く、輸入品も殆ど知られてなかつた。普通の貿易は殆ど破壊されてしまつた。東方との接觸は唯羅馬からの傳導とシエルサレムへの巡拜とだけであつた。それにも拘らず宗教部内や職人の組合内には羅典文明が殘存し幾分か當時の風習を改善した。斯くして内地西部歐羅巴の孤獨的文明、地中海種族の遺物に對する野蠻の奇怪な反動が起つた。而してサラセンの侵入に驚かされ、チャールス、マアテル(カロリング朝の眞の建設者)の下に集り、シャールマン大帝の出づる迄、政治的には聯絡なく、知的には無意味であつた。地中海種族がバルテイツクに復活し北方の剛勇と南方の知畧とが相混和した時に、こゝにゴシツク美術の類なき美を現出した。

暫く此の獨特な文化を生じた移住に就いて見れば、其の關係者は大體に於いて内地人である。彼等のほんの一部が嫌はしい暗鬱な西北海岸に住

んで居る漁夫や水夫であつた。彼等は船や筏を作つた。彼等は旅行好きであつたが、デンマルクより西方に限られて居た。北海又は氷蘭や不列顛の海岸に航海した。遂には不列顛を征服し占有した。ゴール海岸に航海した古スカンデナヴィア人はノルマンとなり、不完全に英化された不列顛を征服した。地中海に於いても船乗を業とする傳統が續いた。伊太利、南佛蘭西、西班牙の港にも水夫の種は盡きなかつた。東方と西方との交通は次第に回復した。エジプト人、クリート人、希臘人及び羅馬人の有つて居た地理、數學、航海術等の知識が発見され、西方の船乗に傳播された。東方との通商は不定であるが、其の航路は變更され、可能性は増加した。かの十字軍は異教徒からジェルサレムを取つたが、これを維持することは出来ず、東方に突入することは失敗した。然し太平洋航路が発見されて航海は長くなり大膽になつた。カナリイ島やアゾル島を後にして希望峰を廻つた。和

蘭人と英國人、佛蘭西人、葡萄牙人と西班牙人とが海國民となり、発見者となつた。太平洋は伊太利人に依つて横斷され、西班牙王國の勢力と金力とに依つて扶持された。太平洋は西部から発見され、地球は周航された。歐羅巴は西半球を探見し植民した。大洋國民は大洋商業に依つて世界の文明を樹立した。

五

歴史と云ふ劇に於ける登場人物は單なる個人ではない。個人の集團、多人数である。是等が單位となつて動作をなす。又其の特徴として道德的及び知的結合を有する。

更に又歴史は一つの場面が種々なる場所に於いて、多少の變化を以つて行はれるが、全體の動作は常に繰返されるに過ぎない。第二幕たる中世史

は第一幕たる古代史の多少の變化を伴ふ繰返である。又第三幕たる近世史も亦多少の變化を伴ふ第二幕の繰返である。是は「歴史は繰返す。」と云ふ諺の事實の根據である。以下簡単に觀察して見よう。

古代エジプトの首府メムフィスに於いて僧侶の集團が崇嚴に行列をやつた。彼等は神秘の主、天眼通たることを揚言した。過去の知識に教へられ、將來を豫言した。彼等は如何なる徵候が豊作や饑饉を示すか、又人間の如何なる行爲が生命の源泉を腐敗し、何が清くするかを知つて居た。今や彼等は人々が危機に瀕せることを注意した。南部の水夫等が口から口へと傳へ、大危難の來ると云ふ風評を流布した。河畔の住人は危異なる儀式を行なつた。彼等は聖所を汚し聖獸を殺した。警告は増加した。澤山の山羊が死んだ。死んだ鱈が浮かんだ。河自身も異常に險惡の觀を呈し、多くの人が是を見た。恐らく谷も三角洲も呪れたやうだ。流行病や更に恐

るべき疫病が明日にも街を襲ふだらう。斯くて人々は行動を要求するやうになつた。王は屢々夢を見て印象されて居た。兵士は集合し動員された。防禦的、攻撃的の遠征が始まつた。土地は清められなければならぬ。争が争鬭となり、争鬭が戦争となる。

エジプト帝國に於いて僧侶は以前の如く幸福ではなかつた。人民は倦まず軍隊を歓迎した。軍隊は傲慢になつた。折々には王が僧侶の代りに軍隊を敬するようにさへなつた。是の一變形であり、恐らく第二の場面であるものがズンメルに始まつた。

土耳其古からの隊商が不穩の狀況を齎した。以前に嘗つてなかつた沃地が荒れたり、井泉が涸れたりした。西アラビヤの山の谷々でさへ收穫は失敗し、數多の家畜が死んだ。シエム人種の一族が東方に移つた。武装せる異人の仲間即ち先驅者がシナアルの平原に居たが見えなくなつた。彼等

は沙漠から來たと思はれた。老ひたる駱駝使はシエム人種の遊牧の民がメソポタミア時代に牧畜して居たことのあるのを思出し、又ある者は「いつもだ」と云ひ、他の者は是を否定し、すべてのシエム人種は沃地の民であり、少くとも峡谷の民であると主張した。何れにしても未だ彼等は全く無害であつたが、如何に多數やつて來るか、そして又それが何を惹起するか誰も知らなかつた。

西方の空に塵埃の柱が起るのは隊商のそれではなかつた。警告はすでに後れた。後から後から無數のシエム人種が襲來して來た。ウルは彼等のものとなり、エリデュは陥ち、ニツブルも又バビロンも彼等の手に歸してしまつた。

今や吾人は斯くの如き叙述をやめて、是等の點に就いて簡單に行動を約説しよう。

二つの運動が互に惹起し共に助長する。一つは領土と生活との爲めの集團争闘であり、他は優越と收入との爲めの階級争闘である。此の二つの運動が歴史を始める。是等が歴史の行動である。

天候に依る恐慌、源泉の枯渴、收穫遞減、不時の困迫が移民の原因となり、それが又人類の衝突を惹起する。これは生死の問題である。團體は防禦の爲めに結合し、征服に依つて合併する。彼等は次第に混合し、次第に積加する。

軍隊の指導者は戦争に依つて發展し、戦争が繼續し繰返されれば有力なる政治家となる。軍隊士官は僧侶階級のやうな階級意識を有し、一つの階級を形成する。彼等は僧侶の優越と争ふ。争闘は長く且つ烈しかつた。僧侶階級は嫉妬を感じ驚かされる。軍隊は攻撃的である。軍隊は分割すべき戦利品や土地を有つて居るが、超自然的許可を確保することは出来な

い。之に加ふるに新しいものであるから尊敬の念を欠く。之に反して僧侶階級は傳統と形式とを有つ。見えない力で物事を善にも惡にもするそれが尊敬を與へ保持させる原因となる。

僧侶と兵士とが争闘に疲れた時王權が一致し法令を布いた。優秀なる僧侶には新しい特權が與へられた。彼等は土地と收入とを受けた。優秀なる軍人は神聖なる指導者として保證され、それ以來集會に招待された。そこで歴史的に世俗的、貴族と靈的、貴族とを生じ、何れも地主となつた。

昔の土地所有種族及び個人の土地所有者は幸運ならば自由小作人となつた。是等の人々は又商人ともなつた。隷屬者の古い共同團體は尙ほ奴隸であつた。職人は幸運ならば自由小作人となり、又組合の特權を享樂した。若しも商人が榮へるやうになるなら、彼等は軍人のなしたやうに階級意識を生じ、こゝに商人と地主との新階級争闘が惹起される。

エジプトとバビロニアの歴史の初期から、ユステイニアンユスティニウスの御代に至るまで團體的集積は常に繼續し、階級争闘は次ぎの階級に依つて吸收される。地中海諸島に於いても、東南の河畔地方、西部亞細亞山地、北地中海半島に於けるやうに酋族が王國となり、王國が帝國となつた。僧侶が軍人に屈服し、所謂「紳士協約」を發明して地主となつた。商人は富を集積して戦はんとする用意を以て居た。

こゝに斷絶がある。帝國は瓦解する。そして戯曲の第一幕は終る。古代史が終つて、中世史が始まる。集團争闘と階級争闘の循環が又新に起る。新しい宗教、新しい僧侶階級が起つた。三三七年コンスタンティンが死んでからその神的權威は讓步された。七四二年にシャアレマンが生れた時その社會的優越は完全且つ疑ひなかつた。然しムール人の北方侵入及びそれを撃退することは其の名聲の爲めに必要であつた。斯くして新し

い軍國主義がシャアレマン及び其の繼承者の下に著しく發達した。知らず識らず寺院は聖地を回々教から清淨にすると云ふ要求に依つて是を助けて居た。十字軍に加れる男爵は有名無實の公爵より有力であり、且つ彼等の追従者は軍隊となつた。彼等は主教と妥協した。神聖羅馬帝國と羅馬の主教達とは何れも「尊嚴」を擁護したが、最後に避け難い取引を締結した。新しい有力な地主階級が創られた。教主とバロンとは貴族となつた。

彼等の内最も有能なるノルマンデイのウイリヤムはランフランクの知的及び宗教的援助を以つて英國の混亂中から最初の政治的君主の西方國民を作り上げた。封建社會と王國との關係を改造して王國を争ふべからざる地位に高めた。彼の無能力な後繼者の下で貴族等が勢力を得て、社會を無政府のやうにしやうとした。ヘンリー二世は兵役免除税、軍隊の法令を制定し、それに依つて王の收入を作り、軍隊を貴族の恩恵から半ば獨立さ

せ、且つ教會法院を一般裁判所に從屬せしめて、王國を個人的支配から國民の爲めの「トラスライツ」に高めた。そこで集團と集團との間、若しくは階級と階級との間の争闘のやうな烈しい争闘が始まつた。即ち完全なる集團——國。民——の優越なる階級との争闘である。最初の衝突は不幸であつた。何故なら貴族が再び勢力を得て、社會は分裂したからである。集團争闘と階級争闘は最初に歸つて中世史が終る。

地中海に於ける基督教は共產主義に傾く貧しい人々の内に生れ、彼等が社會的支配の機能として其の洪大な可能性を見た時偉人に依つて適用された。更に注意深く西北部の基督教、若しくは新教を研究すると、是等が貧しい人々の幻想や希望とするよりも、寧ろ貧しくはあるが自尊せる人々の人格的獨立の確認であることが確められる。故に神學の本質に於いて此の個人的良心の宗教は新しいものではないが、權威に對する反抗として一

分派であり、生活に對する反動として新しい信仰であるから生存競争の新しい實在に依つて發生した。十四世紀の「哀れなりチャード」、「スイリヤムラングランド」頑固なウイクリフ、及び烈しいフツス等は各自の違つた途に於いて此の精神の眞の代表者である。而してコンスタンツやバーゼルに於ける所業にも拘らず、その牧師が僧侶階級にならなかつた理由である。

それにも拘らず此の精神、此の新信仰と僧侶とを以つて近世史は十四世紀に始まる。古代及び中世史の集團争闘及び階級争闘が繰返されるが又多少の變化を伴ふ。百年戦争に依つて展開された新軍國主義は火藥を使用する。新地主々義ランドローディズムは中世的奉仕に代ふるに貨幣的賃料を以つて保たれる。此の當時階級争闘の内で宗教に屬する部分は新しいものである。新教の僧侶は未だ社會的優越も得て居ないし、特權を確保する程強力でもなかつた。且つ重に平民から力を付けられ、其の個人主義は中流階級のもの

である。故にそれは商人階級と結合して、彼等と地主との階級争闘の一要素となつた。従つて多數の聯合は地主主義と更に古い教會主義との間にあり、而して多數の內的集團の争闘は此の結合と國民的王国との間に存する。それはヘンリー八世の下に於ける國家主義の確立、新教の優越に終る。(但しマアリー及びステュアートの治下に於ける短い復活を除く。)

今や終に商人と地主との階級争闘は十分に緊張した。然し暴力には至らない。發見の航海は新しい未曾有の機會を開いた。商業冒險家は勢力家となつた。然し昔の軍人と同じやうに十分な社會的確認を要求した。大商人は彼等と妥協した。大商人は貴族たることを許され、而して貴族は結婚に依つて、若しくは他の方法に依つて、富の收入を獲得した。かくて資本家階級が作られた。

斯くして近世史は正午になる。資本主義は發明と革命的の産業とを開

發した。賃銀獲得の勞働者階級は解放された奴隷に由來し、こゝに階級意識を有つ順番となり、カール・マルクスは劃時的の發見——階級争闘は歴史を作る——をなすに至つた。

七

歴史の創造力は一つの包容力ある事業——よき生活の成就に集中される。其の到達の手段に文化と社會秩序とがある。文化は趣味、生活程度及び技術を包含する。社會秩序は多種の習慣、親族關係及び政略の制度である。歴史以前にあつては摸索したり、試みたり、種々多様の困難に相遇した。而してこゝに文化と社會秩序の萌芽を見る。斯くして歴史は穿鑿し、批判し、拒否し、選擇し、保守し、變化し、附化し、結合し、改正し、改革し、改造する。

文化の歴史は行動の歴史と等しく争闘の物語である。「新」は其の存在の

爲めに「舊」と闘つた。本能、習慣、趣味、感情及び種々なる利害が「舊」を助成した。實驗的衝動、清淨、便宜、安樂、健康、進取性、繁榮等は「新」と提携した。

「た」はそれ自身を保守するに満足しなかつた。「新」に對して争はんと試みた。故に兩者の衝突は殘存しやうとする事業の權利の爲めの戦であつた。「舊」として殘るか。「新」として生れて發展するか。「新」と云ひ「舊」と云ふも共に他に對して其の本來の、若しくは豫想せる極惡をなすことは出來ないものであるから、そこで文明は存在する。

以前に述べたやうに傳襲産を構成する種々なるもの、其の他更に多くのものが如何はしくなつた。遺傳も確實でなくなつた。人類の種々なる知識が種族に關係なく、自然淘汰と同じやうに運命的に人為淘汰に従つた。改新が許されないとこゝろでは經濟的知識も後代に傳は得ない。社會制度の起源、構造、機能及び變轉に關する吾人の知識は大部分科學的歸納に基

こゝに未だ餘り知られない社會制度が残つて居る。是等は幸に人種學者に依つて觀察された。事實科學的の正確さは有つて居ないが、ある程度までの確實性を以つて觀察され敘述された。歴史以前の人々の社會組織は不完全乍らも古物學上、言語學上の研究と歴史時代に殘存した民族的風習、古俗等の助に依つて形成することが出來た。是等の證據は年代記等よりは却つて價值の多いことが屢々あつた。それは後者のやうに偏執がな^いし、又子孫に傳へやう等と云ふ意識的計畫がないからである。是等の制度すべてを一轄し原始的社會制度として記述するのである。

吾人が今日知つて居る複雑な社會制度に比較すると、原始的社會制度は、大部分殆ど信じられない程簡單である。極少數が僅かに複雑である丈けである。特殊の位置、住所と關聯したある典型の聯續に過ぎない。

最初にして且つ最も單純なるものは森林及び叢林に於ける社會制度である。其の根本的形式は小さな群(Horde)と其の交通する多少の群とからなる。是等の各々は男、女、子供を合せて僅かに廿人から五十人迄である。此の團體は血族關係に就いて何も知られてない。唯本能と習慣とに依つて結合したものに過ぎない。

然し其の内部に於いては神秘的關係の觀念が生ずる。種々なる事物が不思議な力——或時は益ある、又或時は害ある力を持つて居ると信じられて居た。幸運、惡運の基ともなり、病源ともなれば、又人を生かしもし殺しもする。それは接觸に依つて人から人物から物へと移つてゆく傳染性を有つて居る。それは「滿那」でも「德」でもある。即ち魔力である。「善き」「滿那」もあれば、「惡き」「滿那」もある。「善き力」を守護し、「惡き力」を却ける方法がある。是等の儀式は集團的方法であつて、各團體に依つて多少違つて居る。是等こそ

單なる動物の群居以上の集合的關係及び連合であつて、明かに人間の特徵を示すものである。

此の觀念及び實際からトーテムズム (totemism) が生じ、而して現に是と同一ではあるが更に複雑な關係が現れた。是は又自然的關係と混淆して一方に偏し慣習的となる。母系的制度が一般に父系的制度よりも原始的である。

草原地方の社會制度は父系的になつたが、尙ほトーテムズムや母系的關係の遺物が多く存在して居た。(Robertson Smith:—Kinship and Marriage in Early Arabia.) 幽霊及び幽霊崇拜の觀念が生じ、是等から又祖先崇拜が發達して來た。父權は母系的制度の下の母方の伯父の權力以上のものとなり、一代以上を包含する家族團體は屢々の族長的親族團體となつた。是が起ると否とに拘らず、族長的制度は恰も母系的社會に於いてトーテムや部族の母

に従つて種々な違つた慣例的種類が存在したやうに、相當に結合した戰鬥者が一つの慣例的種類を作る利益があつた。

草原地方に於いて新しい社會制度が現れた。それは保護を必要とする不幸な人間と他を保護し得る力を持つ人間との間の諒解に基いたものである。原始的社會に於いては種々なる方法で奴隸を得た。彼等自身の過失の爲めに村から追放されたり、彼等の生れた團體が戰爭の爲めに破滅してしまつたその爲めに、彼等は奴隸となつた。他の少數の者は戰爭の際に成功せる指揮者として特別の地位を占有し、分捕物の獲得、若しくは其の他の方法に依つて富裕となつた。草原地方に於いて被征服者は牧丁として保護を受けた。比較的後世に至るまでも草原地方生活が残つて居た愛蘭の古代法たる Brehon Laws に於いて、一部分は持續せる種族制度として、一部分は保護者に對する柔順奉仕として組織された社會を發見することが出

來る。(Henry Sumner Maine:—Lectures on The Early History of Institutions.)

原始的農業團體の社會制度は新しいものと云ふよりも寧ろ舊遺制の混
淆物とも云ふべきものである。親族關係は母と父兩者に依つて關係が認
められる範圍に於いて母系的であるが通常父系的であつた。親族は地方
的團體として連合し、四代の間分割し得ないものとして土地を所有し、而し
て前述したやうな保護者として自分と違つた種族の被保護者に對して居
た。親族それ自體の内にも階級や狀態の不平等が存在し認められ
て居たが、從屬者の間には認められて居なかつた。(Frederic Seebohm:—The
Tribal System in Wales, 及び Hugh Seebohm:—The Structure of Greek Tribal Society)

すべての原始的制度の遺物、即ち宗教的孤獨及び儀式に基くもの、慣例化
された親族に基くもの、及び *beneficium et commendatio* に基くものは現在の社
會にも多く存在して居る。最も興味あるものは *jus sanguinis* や *sacramentum*

fidelitatis のやうな國民的法律の内に存する兩親の市民權や臣從の誓等の規
定である。

すべての文明人の社會制度は古代と現代とを問はず、一般的、典型の變化、
いたものに過ぎない。實際文明と云ふのは文化社會が種族社會に代つた
ものに過ぎない。都市に於いては外國人も集合し、次第に榮へて終には特
權を許され、租税や兵役の根本的義務を負擔するようになった。而して次
第に舊民族と同一になつて行つた。此の制度の根柢は機會と義務との相
互關係である。

此の一般的典型の歴史的變化に就いてはよく知られて居るし、且つ本質
的區別をなし又階級闘争と集團闘争との關係を明かにする爲めに必要な
だけ述べさへすれば十分であると思ふ。

即ち社會は機會が分割されるが不平均であり、特權階級に支配される限

り貴族政治である。社會は機會が分割されるが不平均であり、資本家階級に依つて支配される限り金力政治である。社會は機會がすべてに對して要求されるが事實尙ほ不平均であり、命令する少數者に依つて支配される限り會長政治である。社會は機會が平等となり、支配が平等ではないが分割されたなら民主政治となる。民主政治は若しも財産が平均され職業が命せられるなら共産的である。民主政治は若しも財産が其の大部分集合して保持され職業が命せられるなら社會主義的である。民主政治は若しも大部分の財産が個人的に保持されるが命せられる義務及び制限に従ふなら、且つ職業も財産も同じやうに自由に選擇されるが、義務や制限に従ふならそれは個人主義的である。民主政治と他のすべての社會制度との區別は根本的である。民主政治に於いては、支配が社會のすべての者に關係する。従つて合一された社會は、それを組成するすべての個々の社會より、有力である。

種々なる機能を有する特種の分派がないならば社會は原始的であり重要でない。人類の相違から種々なる職業を生じ階級争闘を惹起する。優越せる少數者若しくは多數者が殆ど絶對的に支配する。革命が生じて從來の社會組織を破壊し、新しい職分的制度が成就する迄社會組織は回復し得ない。民主政治は出来るだけ安價な方法で、勢力を平均しやうと云ふのである。無政府的個人主義は莫大な不平均を許容し、僅かな不平均を禁制する點に於いて誤つて居る。此の兩極端の中間に、社會化された個人主義に於ける更に微妙な平均の可能性がある。

八

吾人はこゝに學說に歸つて論じなければならぬ。すでに一つ解釋法

の假設、——若しも言葉が僭越でないならば歴史の科學的説明に就いて論ずることを約束したが、すでにこゝ迄で讀者は暗示を受けたことと思ふ。

以上述べて來たところの材料は歴史だらうか如何だらうか。分量的には極少數である。然し質量的には科學的試験の上歴史から摘要したものである。云はゞ歴史の記名 (signature) のやうなものである。

吾人の歸納的科學は次第に記號に依つて事物に關する知識を集積する。天文學者は遠い太陽の化學的成分を知つて居る。彼等は其のスペクトルの線内に「記號」を作つたからだ。物理學者は原子を見ないが原子の記號を讀む。吾人が一般化した材料は歴史の指點に外ならない。

歴史の地理的學説は其の範圍に於いて眞理である。文明の起つた地方は多くの人口を維持し繁榮せしめ得たところであつた。都市人口を維持繁榮せしめた地方以外に於いて成功したことは決してなかつた。全歴史

的時期の十分の九以上を通じて歴史の行動は地中海盆地に限られて居た。此の盆地は特徴ある地方から成立つて居た。その各々に違つた文明が起つた。然し乍ら物理的環境が靜的であつた間は何事も起らなかつた。還境的變化が起つて種々な困難災厄に遭遇して始めてこゝに人間の集合的行動が生じ社會の進化と文化の進歩とが生じた。

歴史の生物學的觀察も其の範圍に於いて眞理である。歴史的の民族は繁殖を維持し、同時に變化や長命を可能にする資産、換言すれば動的資産を所有して居た。生存競争に於いて彼等は活動力と適應性とを以つて彼等自身を支持した。又彼等は無意識的に優生的生産者であつた。接近禁制や慣習に依つて、成功より生ずる誇や尊大に依つて、優秀階級の社會的獨占到依つて、——是等の原因が彼等に雜種を制限した。生物學者が Panmixia と呼ぶ混淆を防止した。故に自然淘汰は單に個人許りでなく比較的純粹

種族にも作用した。

又歴史の心理學的觀察も未だ完全に組成されては居ないが、矢張り其の範圍に於いて眞理である。歴史的民族は想像もなし、強い得意も感じ、幻想も夢も見、感激もした。彼等の見た多くのものは幻覺であり、彼等の熱情は屢々脱却した。然し彼等の幻想から發明や發見が生じ、熱情から英雄的獻身も生じたのである。是等の内の最も優れた者が少數者の知的文明に對する獻身的努力であつた。其の内で希臘人は時間に於いても、程度に於いても第一であつた。

歴史の人類學的學説は生物的心理學及び文化的要素を最も有害に困亂させた。バルト族は優れた勢力と意思とを展示したが其の文化は傳來したものであつた。彼等の行つたところは何處でも、優れた地中海種族と混淆して其文化を同化した。歴史に於いて優れた部分が雜種、即ちバルト種

族の文化に依つて説明されると論ずるのは前後轉倒である。それは唯地中海種族の文化で進化させられたバルト族の勢力に依る、地中海種族の文化の利用としてののみ説明することが出来る。成就するのは文化に依つて優越であり得る種族の歴史的事業である。

歴史の社會學的學説は未だ形成されて居ない。最も著名なる歴史的民族は部分的利益に對する合成的利益、集合主義に對する個人主義、是等兩者を平衡するのに他の民族より成功する可能性が多かつた。

是等の歴史學説はすべて其の範圍に於いて眞理である。然し乍ら是等の一つも歴史を説明するものではない。是等は悉く歴史を形成する、若しくは歴史を形成し得る條件を説明するものである。然しその何れもそれが何故實際であつたかと云ふことを吾人に告げるものではない。

何故ならば歴史は人間の行爲であるからである。歴史は、何時、しか、漠然、

として起り、曲れる水路を作り、集合的行動の無數の支流に依つた流れ、未だ開かれざる將來の霞の内に洋々として流れて居る行爲の流である。

ある場合には無數の共同に依つてなされる人間の歴史的行動は盲目なる本能的であつたこともある。又ある場合には——次第に増加しつゝあるが、前以つて考へた政策の試であつたこともある。是等は一人の人に依つてなされたものではない。此の理由に依つて、寧ろ定命的な理由に依つて歴史の偉人學説は破られてしまつたのである。是等のものは空想家の心の内に空想として描れ、やがてそれが實行家に依つて行はれた。集合的行爲に變ずるには實行家が關係して、團體階級、黨派、仲間、少數者及び多數者、是等の内の實力ある者達に實質的利益を約束して加入せしめた。連合は動的の多數であつた。「黨類」*gangs*、「徒黨」*gangs*若しくは「黨派」*juntos*は「何處へか行かう、若しくは何かをしよう」と心を向けて居たのである。それが全體に於

いて惡より善の方が多くなし就けられたから、尊い適當な名稱が與へられてもいゝ譯である。即ちそれは合成せる首唱者(*composite protagonist*)であつた。而して是が大膽に進み、説得、誘惑、威嚇、強制等の人間の知れるあらゆる技術を以つて歴史を作つたのである。戦争及び階級争闘を起した。敵に依つて覆され、失敗に依つて破壊され、征服に依つて従はされ、若しくは革命に依つて廢されるまで自己改新を行ふのであつた。

歴史と云はるべき行動に於ける關係者として、即ち本能的な群集、遍歴して居た經驗家、政策を豫想する卓見なる首領等はその原始的な人間の本性以外に共通な一の特徴を有つて居た。さもなければそれは眞に彼等の人間性それ自身と呼ぶべきものであつたらう。何れにしても彼等は一の包括的種類のものであつた。即ちすべてが冒險者であつた。すべては大膽で前進的であつた。彼等は笛の音にも誘れ、誘惑物にも導れた。金の瓶の

爲めに土を掘つたり、紫の山に登つたりした。彼等は、歡喜に逢はんが爲めに、ある「樂しきジェルサレム」に巡禮せんと出掛けた。彼等は航海した、戦つた、掠奪した、復讐した。彼等は帝國を飾つたり分割したりした。絶えざる苦闘を以つて社會秩序を創造し、而して醉へる惡魔のやうに是を破壊した。彼等は星をも讀み、原子をも分割した。

故に歴史は冒險である。而して冒險に對する促進が歴史の原因である。此の命題がギイディングスの學說の要點である。

要するに嚴密に科學的であることは、冒險に對する促進及び冒險に對する反動の平衡は勢力減少の歴史的に行はれる様式である。

九

歴史を科學的に解釋する方法、人類社會の發達を純然たる自然科學的方

法を以つて觀察するのに、ギイディングスの方法が適當であるか如何かに就いては勿論異論のあること、思ふ。前述したマルクスの社會觀も亦一種の科學的社會觀である。唯、あらゆる人類の行動の動機を、全體的に、觀察する時に、吾人は一の有機的組織が何等か一定の原則に従つて動搖して居るかかの如く思はれる。此のことは本章に於けるギイディングスの歴史に對する一般的敘述を見ても解るだらう。人類は事實人力以上のある力——自然力、創造力——に包括されて居るのかも知れない。(第三篇第三章參照)然し人間は生活には食料を必要とする。云ふやうな自然法則に支配されると共に、如何なる食料をよしとすべきかと云ふやうな價值法則をも顧慮する。而して宇宙の自然法則を闡明すると同じやうに、時にはより以上の利害關係を以つて生活價值の實體を明かにする必要が生ずる。ギイディングスが歴史は冒險であると云つた言葉は唯それだけとして

も興味多い言葉である。社會は飛躍を必要とする。何等の飛躍なき社會は死の社會である。新に創造さるべき社會は舊社會に對する叛逆であり、かゝる叛逆を取て試みるのは一の飛躍であり、冒險である。社會の改造を企つる者は勿論、個人と雖も其の人格の創造に當つて程度の大小こそあれ、すべて多少の冒險をなさなければならぬ。

すべての社會觀が少くともある眞實さを以つて判斷されたものであるならば、其の立場の相異はあるにしても、何等かの眞理を有し、一面の解釋をなすものである。こゝに特にギイディングスの所説を紹介したのも、要するに斯くの如き判斷も一の眞實として許容しなければならぬことを示さんと欲したに外ならない。唯斯くの如き歴史解釋——社會觀を以つて唯一のものと見做し、沒價值的解釋をなさうとする者には賛成することは出来ない。更に此のことに關しては次章に於いて詳述する。然し吾人は後にも述べるやうに、是等の社會觀から多くの眞理を獲得することが出来る。

第三章 社會發達の理想的要素

一

社會は發達し變遷する。然しすでに述べたやうにそれは單に必然的に定命的にのみ變化するのではない。社會の發展には吾人々類の努力と犠牲とを必要とする。單に經濟生活の擴張擴大に止まらず各個人の自我の覺醒に對して社會組織の改造に努力を必要とする。

社會改造の叫びは吾人の常に耳にするところである。現存する社會に對する不平忿懣が絶えず社會は改造しなければならぬと云ふ思想となり、議論となり、行動となる。此の事實は何も現代に限る現象ではない。歴

史的實證に徴する迄もなく如何なる時、如何なる社會に於いても常に稱へられて居たのである。歴史を一つの冒險と見るのも社會改造が一の飛躍であるからである。故に此の意味に於いて歴史は又社會改造の過程であるとも云へよう。唯其の時代々々に於ける個人の自覺と物質的狀態との程度と其の當時の社會組織との關係如何に依つて、ある時は強^く其の必要を高唱され、ある時は *Undercurrent* ^{暗流} として著しく表面に顯れないことがあるだけである。少くとも社會の一部に於いては絶えず社會改造の企圖は考へられて居るのである。改造が企てられない社會は死滅せる社會以外にあり得ない。現代のやうに物質的生產組織の方面と精神的な人格價值の方面と甚しく齟齬して居る時代にあつて社會改造の問題が喧しく論せられるのは當然である。

以下本章に於いて述べやうと思ふのは斯くの如き社會改造の直接の手

段に就いてははない。將た亦何が故に社會改良を必要とするに至るかと云ふやうな根本的問題に就いてはもない。唯吾人が現存する社會に對し不足を感じ、是を改造しやうとするに當つて、又廣く社會全般の發達に際して、目的論的考察——換言すれば理想を包含する必要があるか如何か。更に若し理想を必要とするならば如何なる點に於いてあるか。是等の問題に就いて先づ第一章に述べたところを更に擴充し、本書に於いて採るべき立脚地——社會觀を明確にしたいと思ふのである。

二

社會改造とは何を云ふのか。云ふ迄もなく現存する社會よりも吾人一般の生活に適應した社會を作らうとするにある。従つて普通我々の生活を精神的生活と物質的生活とに分けるやうに社會改造に於いても、吾人の

精神的生活を改造する精神的改造と物質的生活の改善である物質的改造と二つあると云ふことが出來よう。物質的改造が具體的で直接的である、に反して、精神的改造が抽象的で間接的であるが爲めに、屢々、閑却される、ことが少くない。空腹を感じて居る者にあつては精神修養を説かれるよりも、一塊のパンを給與される方が遙かに有難い。極めて不完全な生産組織を有する社會に向つて、唯徒に道徳的理想論を説明するも何の甲斐もないことである。然し乍ら後にも述べるやうに物質的改造のみが社會改造の全部ではない。

以上は改造の目的物の如何に依つて區別したものであるが、云ふまでもなく此の區別は嚴密に分かつことが出來ない。次ぎに改造する手段の方面から考ふる時には、因果律的、改造論と、目的論的、改造論とに區別することも出來るだらう。第一章に於いて示したやうに、前者は所謂唯物論的の觀

察と云はれるものであつて、吾人々類は唯其の大勢を推察して是を促進させるばかりである。即ち因果律を以つて社會改良に論及しようとするものである。此のこと自體がすでに矛盾することは暫く問題としないとしても、斯くの如き觀察を以つて文化の全體を説明することの不當なるは繰返して論ずる必要もなからう。(拙著「經濟的文化と哲學」第三篇參照)後者は所謂理想論である。ある一定の目的を樹立して、其の進化の目標に添ふやうに社會を改造しようとするものである。進化の意義が、一方生物學的に、自己の境遇に對する適應(Adaptation)であると共に、他方論理學的に選擇目的(Auswahlzweck)を豫想するのである。尙ほ後に自ら此の問題に觸らなければならぬだらう。

三

人間が生存したいと云ふ欲望を棄てない限り、あらゆる社會改造の内で、物質的方面程重要なものはない。此の點に於いてマルクス、エンゲルスの所論は常に眞理であることを失はない。然し乍ら前に述べたやうに物質的改造が社會改造の全部ではない。又因果律的に考察する者と雖も、純粹に唯物的であるとは云ひ得ない。例へば彼等のある者は普通社會進化の主たる要素は其の環境(Environment)であると云ふ。然し其の環境と云ふも單に氣候、風土、溫度、濕、乾等の所謂物質的方面のみを云ふのではない。過去に於ける感情、觀察、習慣等は勿論、文學、傳説、其他附近に住居する他民族のそれ等から受ける影響をも含まなければならぬ。即ちエスキモー(Eskimos)の環境は其の附近の種族たるラブラドル(Labrador)の外界的狀態、及び二三の旅行者から受ける影響、並びに先祖のエスキモーから受けたる傳統等から成立するものである。而して文明國になればなる程、其の程度も、其の

範圍も擴大され、複雑になる。(John Fiske: - Outlines of Cosmic Philosophy. Part II. Chap. xviii 参照)斯くの如く環境の意義を解する時は、假令是等の精神的要素が其の根本に於いて物質的影響を受けたものであるとしても、今日社會の改造を論ずるに當つては、是等精神的要素の影響を無視することは出来ない。更に後代の人類に多大の影響を與へる現在の精神的生活を、出来る限り改善しようとするのは決して無意義なことではない。其の人類の赴くべき歸趨を明かにして、現代の精神的改造を促進するのは現代人の義務である。』是は吾人が唯因果的觀察の立場に立つて、暫く社會進化の精神的方面に就いて述べたのである。更に目的論的立場に立つて此の方面を觀察すれば、吾人は自ら本章の問題たる社會發達の理想的要素に就いて論ずることゝなる。今直ちに此のことに關して述ぶるに先立つて、少しく社會と個人との關係に就いて概論して置く必要があると思ふ。是に關する詳細の議論は第二篇に於いて述べる。

四

「社會は個人と全く別個の性質を有するものであることはデュルケムの詳述するが如くである。けれども社會を離れて、個人の存在を考へられ、いやうに、全然個人を無視して社會の成立を許容することは出来ない。」

(Gehlke: - "Emile Durkheim's Contribution to sociological Theory." 参照) 此の事實から通常社會改造と稱せらるゝものゝ内に二つの方面があることを知り得る。一は社會全體としての改造である。分配制度の改善とか、都市制度、交通機關の改良と稱せらるゝものは即ち是である。第二は社會に於ける個人の改造である。教育、體育等の設備が是に屬する。今是等兩種の社會改造を見るに、社會として是を行はんとすれば勢ひ強制するの必要がある。然る

に現代人の要求するところは何であらうか。それは論ずるまでもなく自我の覺醒から生ずる自由解放の要求である。現代の社會運動、勞働運動がマルクス主義から離れて理想主義に向はんとするのは、此の間の消息を語るものではないだらうか。故に社會が社會としての慣習傳統を以つて自覺せる個人に對する時は、必ず失敗に墮ちざるを得ない。これ現代に於ける社會改造が過去に於けるそれよりも、更に一層個人の改造を必要とする所以である。個人性の自覺は一般に於いて次第に社會の強制力を弱めてゆく。之に反して個人の意義、個人の價值は益々其の重要さを認められて來る。社會改造も斯くの如き個人の價值の重要視と共に、自ら其の意義を變ぜざるを得ない。社會改造の眞意義が其の社會に住する各個人の天賦の才能を十分完全に發揮するにあることは、余の屢々述べたるところである。(前掲拙著及び第三篇參照)故に社會改造の基本は先づ一部個人改造を基本としなければならぬ。こゝに於いて少しく個人そのものに就いて論ずる必要が出て來る。

五

「個人の社會に於ける地位は如何にして決定されるか。換言すればある個人の生存の價值如何の問題である。それは其の個人の有する性質の範圍と、その相互關係とに依つて定めらるべき筈である。其の性質は其の生活の内容となつて表現される。感情、思索、行爲、體驗は其の内容を語るものである。其の各自に就いて種々なる對立が存して居る。深きに對する淺き。高きに對する低き。無限に對する有限。廣きに對する狭き。是等種々なる對立が各個人の性質狀態を制約する。而してそれ等相互の關係がこゝに個人の人格を形成するに至る。」

元來個人は、それ自身に於いて、一の統一を有する。而して其の個人は其の統一——前述せる内容の如何に依つて、個人相互の間は各自相違するけれども——を通じて宇宙の諸現象を観察する。故に如何なる表現も主観的なる人格的色彩を有するを常とする。斯くの如き統一が、完全に、なれば、なる程、其の者は個人としての自覺を明確にすることが出来る。故に時として、は自我の主張者に頑迷固陋なものがあり得る。そは其の内容に於いて、淺く、狭く、低きが故である。従つて其の内容に於いて豊富に、其の統一に於いて完全なる者が最も生存の價値を有する者であると云ふことが出来るだらう。吾人はこゝに價値判斷を下して居るが、此の價値判斷の根本は上述したところに依つても略々明かであらう。

故に個人自身の改造は個人としては自己の天資を豊富ならしめ人格的統一を完全ならしむる方へ向ふべきであるが、此の點に於ける社會の職分は唯個人をして容易に其の機會を與へるようになると云ふ消極的方面に止まる。これ以上社會は何等の強制力をも有さない。然るに過去に於いては勿論、現在に於いてもすべての人類の自覺が此の點まで發達してゐる譯ではない。故に社會は單に上述の消極的方面にのみ止まらないで、ある程度まで積極的行動に出でざるを得ないのである。即ち社會改造の運動は一方其の社會組織を個人の價値完成に寄與するところ、あらしめると共に、他方個人の自覺を促進するように形成する必要がある。従つて此の方面に向つて便宜であるやうに、社會の經濟的構造に適應することが必要である。これは特に云ふ迄もないことであるが、それと共に又社會の制度を個人の精神的方面の開拓に資するところあるやうに改良しなければならぬ。以下其の理由に就いて余の考ふるところを述べようと思ふ。(G.)

Simons — "Lebensanschauung," Kapital. I. II. 及び C. D. H. Cole:—"Social Theory," chapter

XIV 參照尙ほ社會の個人に對する強制力に就いては第二篇第二章で詳論しよう。

六

「吾人の社會生活を出來るだけよくすると云ふのは、各個人が其の人間としての生活を十分完全に送るやうにすると云ふにある。従つて一方物質的に幸福であると共に、精神的にも幸福でなければならぬ。今何が故に社會を改造するに當つて理想を必要とするか。唯單に物質的充足のみを以つてしては、何が故に根本的の改造を期待することが出來ないのか。社會全般として個人の精神的開發が何が故に必要であるのか。是等の問題に關して先づ個人的場合に就いて述べよう。

個人といひて社會に於いて、精神的にも、物質的にも、甚だしく其の満足を得、

得いてない者は貧民である。今貧民の生活を改善しようとする者は如何なる手段を採るのが最も適當であるかを考へて見よう。それには先づ貧民の生活を知らなければならぬ。此の點に就いて詳述すでき餘裕はないが、一言を以つて云へば、彼等の生活は多く本能的以外に出づることがないと云へよう。彼等の行動は多く動物的反射運動に過ぎない。貧民窟視察と稱する美裝した男女の群に對して彼等が何等の反感をも感じないのは若しくは反感を表明しないのは、全く理性的反省作用に缺乏して居るからである。意思薄弱、怠慢、貯蓄心の缺如等がよく貧乏の人格的原因として計上される。其の天賦の才能に關しても屢々貧民研究者から、根からの貧民から天才を作り上げることは絶望である。」と云ふ言葉を聞かされる。斯くの如き性格を有する貧民に向つて、徒らに物質的改造のみを試みても何の役にも立たない。かの貧民が新築家屋よりも汚い家を好むのは、單に

經濟上からの問題ではない。然し乍ら貧民は終に救助し得べからざるものであるから、是を牛馬と同一視しても差悶へなしと云ふ論斷を下すものには賛成が出来ない。斯くの如き斷定は少しく人としての良心ある者にとつては口にすゝさへ好ましからぬことであらう。貧民は其の遺傳と其の境遇とから今日の如き運命に遭遇するに至つたのである。其の永き歴史を一朝にして改善するのは不可能なことではあるが、漸次是を改善することは絶望ではないと思ふ。殊に貧民、幼兒の精神的開發は最も必要なことである。勿論かゝる方面の改造に最も直接に必要なものは物質的給付である。然し單に物質的に豊富ならしむるのみでは、到底貧民の改造に成功し得ないこと前述の如くである。即ち先づ是等貧民に何等かの理想を與へ、其の本能的衝動生活から離れて、次第に理性的自由意思の生活に向はしむることが肝要である。云ふ迄もなく斯くの如き事業は最も根氣を必

要とする。(賀川豊彦「貧民心理之研究」及び Will Reason:—"Poverty" 等参照)

以上は特に貧民に就いて述べたのであるが、是は單に貧民に限らるべきものではない。特に貧民に於いて甚しいことが後に述べるように最低生存資料の保證を必要とする。「普通人と雖も理想の缺如して居る者が、其の行動の瞬昧模糊たることは敢て多言を必要としないだらう。之に反してかの唯物論的社會主義者の如きは其の説として理想を排斥して居るにも拘らず、人自身としては一個の信念——理想を有して居ると云へよう。若し彼等に理想がないとしたならば、何故彼等が説くが如く現代社會にもつと適應した生活を送らないのだらうか。將來の社會は斯くなるべきであるかと考へるのはすでに一個の當爲(Sollen)であり、理想ではないだらうか。吾人は社會の物質的要素を排斥する者ではない。然し如何なる社會の發達にも理想を伴はぬものはあり得ない。」

以上は個人の立場に就いて考へて見たのであるが、次ぎに更に社會全般の改造運動に於いて理想の必要なる所以を簡単に述べようと思ふ。

七

社會全般の運動として理想の必要なる所以を述ぶるに當つて、少しく戦時中に於ける獨逸社會運動の實際の現象を借りることゝしよう。

獨逸に於ける労働者の代表的政治團體は獨逸社會民主黨である。然るに同黨は戦争の開始と共に多数派と少数派とに分裂するに至つた。少数派はリーブクネヒト、リユーレ等の過激派、所謂「スバルタカス」派は勿論、カウツキー、ベルンシュタイン等一般に戦争否定、少くとも當時の戦争が獨逸にとつて防禦戦にあらざるが故に、戦費の協賛を拒まんとしたものである。多数派はシャイデマン、エーベルト、エツプリン等に依つて主張さるゝ戦費

協賛繼續派である。少くとも一九一四年八月四日戦争開始の際、議會に於いて同黨の總裁「レーゼ」が黨の宣言として戦費協賛の態度に就いて述べて、「露國專制主義の勝利は我が國民及び其の平和的發展の終末を意味すると云へるだらう。此の危険を除去し、而して文明を擁護し、我が祖國の獨立を維持するのは、實に吾人の義務である。」と云つた言葉を遵守する者である。此の兩派の對立はやがて一九一七年四月の少数派の分離と云ふことになつた。新團體は獨逸獨立社會民主黨と名づけられた。而して是等兩派はずつと戦争の終結するまで、互に其の主張するところに依つて勢力を争ひ相譲らなかつたのである。

以上の社會黨兩派の論争に於いて、其の勢力の根源であつた一般の労働者は果して各々其の信するところに従つて行動したのであらうか。一般労働者の實際的行動は、理性的に論理的に決定されるものではない。彼等

の首領の説くところは彼等自身の行動と相關するところ極めて少ない。彼等は彼等自身の直接境遇に影響さるゝに従つて變化するのである。戦争の繼續するに従つて獨立社會民主黨の勢力が増加した所以のものは、何も労働者が急激に平和的精神に目覺めた譯でも何でもない。一方血族の戦死に對する悲痛の感と、他方經濟的缺乏より生ずる日常生活の困難から生じた稍々自棄的の結果に外ならない。故に彼等は永遠の平和を願ふのではなくして、兎に角目前の急速なる平和を欲したのである。それは眞の理性的運動ではなくして、單なる本能的運動に過ぎない。

“German Social Democracy during The War.” 參照)

(Edwyn Bevan:—

斯くの如き事實は何を語るか。即ち是等はあらゆる民衆運動の特徴ではあるが、常に眼前の事實に依つて支配され、少しも將來并びに運動自身の價値を顧慮することなく、本能的反動的に動いて居るに過ぎないのである。

斯くの如き運動が如何に危険であるかは先覺者の傳記を繙く者の常に感ずるところである。我が國に於ける歐洲大戰後の經濟的恐慌前後の社會運動を比較する時、更に其の朝にあると野にあるとに依つて其の説を適宜に變じ得る我が政黨員の運動を見る時、恰も周圍の狀況に依つて毛の色を變ずる保護色動物を見るの感がある。彼等の内のある者は自ら民衆の指導者を以つて任じ、一見社會の先覺者の如き態度を裝つて現れて来る。然し乍ら少しく是を冷靜に觀察すれば、彼等は社會全般と云ふよりも、唯彼等が迎合するのに最も都合のいゝ團體に對して阿諛するに過ぎない者であることを看破し得るだらう。故に朝にあつては貴族富豪の意を向へ、野にあつては所謂民衆に迎合するのである。即ち夏冬に依つて毛色を異にする狐と異なるところを見ない。かゝる人物の輩出することは眞の労働問題、社會問題の解決に對して甚だ大なる害を及ぼすものである。然らば斯

くの如き事實は如何にすべきか。以下節を變へて述べよう。

八

上述したところは寧ろ因果律的に考察することの出来る範圍内である。民衆の行動を心理學的に、生物學的に觀察すれば、其の原因は自ら明瞭にすることが出来る。然し乍ら是等の點を深く考究することなく、自己の思想、自己の考から直ちに彼等民衆の運動を推斷する時は、大なる誤謬と失望とを経験するに過ぎないだらう。例へばある社會改良家が民衆の生活改善の爲めに、賃銀の値上げ、労働組合の設立等を高唱したとする。其の結果大多數の労働者の賛同を得た。そこで彼は直ちに労働者自覺せりと論斷するとすれば、それは多くの場合大なる誤である。ガルスワーシーの戯曲「争闘」は此の間の消息を巧みに描寫して居るものと見ることが出来る。

恰も前述せる獨逸獨立社會民主黨員の増加が何等獨逸労働者の平和的理想の自覺の増加を語るものでないと同一である。

吾人々類も亦一の生物である。従つてあらゆる動物と同様に、本能的に衝動的に動くことも亦止むを得ないことである。従つて本能的な生活は吾人の生活に於いて、極めて有力なる部分を占めて居ることも否定出来ない事實である。然し乍ら何等規準とするところなく、其の日其の日に適應してゆくことが極めて危険でもあり、文化の進歩を豫想し得ないことはすでに述べた通りである。此の方面より見れば、所謂社會改造の如きは何の意味をも有たないこととなる。即ち保護色的改造論者を以つて唯一無二の社會指導者としなければならぬ。社會の眞の進化がかゝる者に依つて建設され得ないことはこゝに詳論する必要もあるまいと思ふ。今は直ちに眞の社會改造に必要な要素に就いて論歩を進めよう。

九

「すでに述べたるが如く、個人として最も價值あり意義あるものは其の人格的統一である。斯くの如き人格的統一が基本となつて、始めて其の者が諸現象に對して一定の價值判斷が可能となるのである。此の立場に立つて自己を創造してゆくこと、換言すれば自己の人格を中心として價值的統一を形成してゆくことが個人としての理想である。個人自身の改善修養は斯くの如き理想に依つてのみ意義を有するのである。」

「社會運動に於いても同一のことを云ひ得ると思ふ。」元來社會を改造せんと欲するのは一部人士の自覺に基き、現代の缺陷を感得し、是を補足せんとして發するものである。假令會々其の者にとつて斯くの如き改革を企つることが周圍の事情極めて不利であつたとしても、自覺せる者にとつて

は、其の社會の缺陷を補足しようとする理想を高しとして、遂行せざるを得ないのである。社會發達に於いて第一に最も必要缺くべからざるものは斯くの如き自覺者が眞の理想——出來る限り完全なる人格的統一——を有して、一般民衆を指導することである

第二に社會發達に於いて必要なことは一般民衆の自覺、換言すれば各自が一層大なる理想を有することである。少くとも彼等を指導しようとする所謂自覺者が果して眞の自覺者であるか、或ひは又單に民衆若しくは特權階級に迎合する附和雷同の徒であるかを、自己の理想に照合して冷靜に是を判斷する能力を養はしむる必要がある。さもないと社會は眞の自覺者を認識することなく、却つて場當りの巧みな老獪者流に迷はされ、其の進歩を阻止するに至るだらう。否それ許りではなく、時に依ると眞の先覺者を殺害し、しかも自らよしとして徒に後代の嘲笑を招くような悲劇を演

することもあり得る。歴史が今までに幾度か此の悲劇を繰り返して居るのは眞に人類のために悲むべきことである。斯くの如き悲劇を再びしないようにするには、如何しても一般民衆の理想的意識を促進せしむることが必要である。

一〇

以上述べたところに依つて、社會を改造進化せしむるに當つて理想的要素が必要であり、且つ其の重大なる所以を略述した。換言すれば社會發達に於いて理想的要素の占むべき地位に就いて述べた。然し乍ら吾人は社會發達に於ける物質的經濟的要素を無視する者ではない。否寧ろ甚だ重大なものであると考へて居る。飢えたる者には先づパンを與へる必要がある。社會の改造は先づ經濟的下建築 (Unterbau) の完成が必要である。唯それと共に各自の個人的自覺を促がす必要がある。パンを獲得しようとするのは生きんがためである。故に吾人はパンを得ざるべからずとするに止まらないで、更に何が故に生きようとするのかを考へさせることが社會を發達させるのに必要な條件である。

社會發達に於いて理想の必要な所以は屢々人の説くところである。上述の如き理想が各人の人格的内容の如何に依つて、あるひは藝術に、あるひは宗教に、あるひは科學に、あるひは哲學に、其の他あらゆる文化的所産となつて表現せらるゝことは最も好ましいことである。物質的改造と精神的改造と何れを先にし、何れを後にすべきか。兩者相共に同時に行はれなければならない。一方因果的考察の進歩は、目的論的考察に依つて、進められる文化の行程に、出来る限り添ふやうに導かれる必要がある。

上述のことはすべて吾人社會の發達を欲する者にとつては極めて自明

のことである筈である。所謂一の *trium* に外ならない。而も尙ほ繰返す必要があると云ふのは悲むべき事實であると云はなければならぬ。若し吾人が理想を豫想する目的論的社會觀を採ることが誤でないとするならば、社會の發達に際して是等のことは絶対に必要なものであらう。

第二篇 社會と個人

第一章 社會組織と結婚制度

社會と個人とが極めて密接なる關係を有することは、特にこゝに詳論する迄もないが、其の一端を示すものとして、原始民の結婚制度に就いて述べよう。大體リバース (W. H. R. Rivers) の著「親族關係と社會組織」(Kinship and Social Organisation) に従つて紹介する。要は種々なる制度も、其の當時の社會組織を基本とすることを明確にすれば足りる。即ちこゝに論じようとするのは、親族關係と社會組織との密接なる關係、更に換言すれば、是等の關係の根柢をなす結婚制度に就いて、少しく論じよう云ふのである。

同族關係に就いて吾人の最も興味を牽くものは等級制度(Classificatory System)である。等級制度には種々あるが、一例を挙げれば父の兄弟はすべて父であり、母の姉妹はすべて母であると云ふやうなものもその一つである。今此の種の問題に關する議論を一瞥する必要がある。先づ第一に擧げなければならぬのはリュイス・モルガン(Lewis Morgan)である。彼は同族間で互に指示する方法を明瞭にした許りでなく、其の莫大なる材料を蒐集した點に於いて第一であるとして云はなければならぬ。然し乍ら此の材料が多過ぎることが、却つて彼の著作に多くの累を及ぼした。然し是は寧ろ附隨的原因であつて、其の主たる原因は彼が其の材料に依つて同族の等級制度の術語と社會組織の形式との關係を明瞭にするだけでは満足せず更に進んで其の術語の起源と社會組織の形式と直接關係せしめやうとしたが爲めであつた。即ち其の結論として示すところは男女混合の團體結婚に

依る社會狀態であつた。これ一部のものから攻撃を受けるやうになつた所以である。

モルガンの反對者としてジョン・ファグソン・マツクレナン(John Ferguson McLennan)に就いて述べる必要がある。彼は家族關係を指示するのに用ひられた言葉は單に社會的交際の禮儀上に使用されたに過ぎないと云つて居る。従つて彼に従ふ者は等級制度は單に呼び掛けの言葉、交互の會釋であるとして主張して居るが、それなら何故等級制度の言葉が會釋となつたかと云ふことに就いて彼等は少しも説明して居ない。

モルガン及びマツクレナンが共に等級制度を以つて社會狀態に依つて決定されたものであるとして居るのに對して、クロウベル教授(Prof. Kroeber)は反對した。斯くの如き同族間の言葉は社會的原因に依つて使用されるのではなく、言語的、心理的原因に基くものであるとした。是等の所説を一

々こゝに紹介する餘裕はないが、兎に角モルガンの所説に對する反對として大體二つ擧げることが出来るだらう。即ち第一に等級制度は呼びかけの言葉であるのに過ぎないと云ふ反對。第二に斯くの如く關係を表示する方法は社會的に定まるものではなくして、心理的に決せらるゝものであると云ふ反對とである。以下順次に其の當否に就いて述べようと思ふ。

二

モルガンは等級制度に甚しく動かされたものらしい。彼は其の材料を北方亞米利加印度人から得たのであるが、マツクレナンも亦モルガンの蒐集した證據に依つて論じたのであり、従つてモルガンの強調するところの影響を受けたことは勿論である。然るに尙ほマツクレナンはモルガンの所説を否定して、等級制度の言葉は呼びかけ會釋に過ぎなくして、社會組織

に重大なる關係なしとして居る。然し果して此の説は正しいだらうか。或ひは一般的であるとは云へないかも知れないが、等級制度に用ひられる名稱は亦社會的實際行爲と關係があるやうに思はれる。例へばある言葉を以つて呼ばれて居る人に對しては、必ず常にある一定の行動をしななければなかつたが如きである。即ち其の人に對してある一定の義務を負ふとか、ある特權を持つとかすることである。今こゝに其の一つの實例を擧げる。

バンクス島(Banks Island)に於いて二人の義兄弟(brother-in-law)の間に用ひられる言葉は wulus, walus, walui である。而して是等の言葉の一つを他に適用した者は決して其の名を呼んではならない。又二人は如何なる場合も極めて互に親密でなければならぬ。又ある島、マアラフ(Merlav)の如きは是等の親族間にあつてすべてのものが共有である。危険に際するやうな

ことがあると互に扶助し、忠告する。必要の場合には自己の生命をも賭する。若し一人が死ねば他の者は其の遺族を保護する。更にこゝに面白い規定がある。それは頭の神聖に關する規則である。義兄弟の頭の上にあるものは何ものと雖も取つてはならない。其の頭の上を翔んだ鳥さへ、捕つて食つてはならぬと云ふのである。ある者が「是はお前の義兄弟の頭だ」と云ひさへすれば、云はれた者はそのものゝ使用を禁ぜられる。若しそれが食物ならば食べられない。若しそれが作られつゝあるもの、例へば筵のやうなものなら、其の製造さへ中止しなければならぬ。唯僅かに其の頭の所有者たる義兄弟に謝罪したる後、製造を繼續することが出来る。斯くの如き慣習は吾人より見れば極めて滑稽のやうに見えるけれども、彼等にとつては甚だ重大なる實際問題である。以上述べたるところに依つても、等級制度と社會制度と多少とも關係あることを知り得るだらう。勿論す

でに述べたるが如く、是等の慣習が決して一般的であるとは云へない。然し是等に就いて嚴密に調査すればする程、現在現れて居るよりも一層重大な意義を有するものと云ふことが出来よう。

以上の點より見て吾人は吾人自身のそれと比較して二個の相違を知り得る。第一に現在にあつては社會制度と親族關係と關聯甚だ少なきこと、第二によいある制度が關係あるとしても殆ど個人間に制限されて居て、ある階級の個人全體に關することはない。此のことは後にも述べるが如何なる理由に基くのであらうか。恐らく社會の進化と共に個人の自覺が生じ、それが個人主義的傾向に發展した爲めではあるまいか。(前掲拙著第三篇參照)

更に吾人の注意すべき點は斯くの如き親族間の稱呼の存在するといふに依つて、親族關係に關する特別の規定の存在が決定されることであ

る。ポリネシア (Polynesia) 中ハワイ人 (Hawaiians) とニイウ (Niue) の住民とは母の兄弟と父との稱呼に區別がない。従つて母の兄弟に歸すべき特別の義務制限、特權等はない。之に反して同じポリネシアの内でもタンガ (Tanga) とティコピア (Tikopia) では母の兄弟に特別の稱呼があるからして、又従つて特別の規定が存在する。西ソロモン (Solomon) 島は母の兄弟に對する特別の稱呼を發見することの出来ないメラネシア (Melanesia) 中の唯一の場所であるが、又是等の血族に對して何等特別の制度の存在を發見し得ない唯一の島である。

是等の研究は勿論完全であるとは云へないかも知れないが、少くとも是等兩者の間に關係のあることは否定することが出来ないだらう。次ぎにメラネシアとポリネシアに於ける他の血族關係を調べて見ると、最も著しい例外はバンクス島に於いて父の姉妹に關する特別の稱呼がないにも拘

らず、甚だ重大な特別の制度が存在して居ることである。是等の島に於いて父の姉妹は *vev* 若しくは *veve* として母と等しくされて居るが、然し是とも完全に一般的になつて居ると云ふ譯ではない。母と區別して *veve vus* *have* と呼ばれて居ることもある。

以上述べて來た如く等級制度の稱呼が單に社会制度に影響あるに止まらず、其の稱呼の有無が制度の有無に密接なる關係がある。マツクレナンが是等の稱呼を單なる呼びかけ、會釋の一種に過ぎないとして、自ら問を發して、「如何なる義務、如何なる權利が等級制度中の親族關係に依つて影響されるか」と云ひ、自ら答へて曰く「全く無し」と。(McLennan:—"Studies in Ancient History," p.366) 若しマツクレナンにして以上述べた實例の一つでも知つて居たならば、恐らく斯くの如き斷定を下すことを少くとも躊躇したゞらう。

三

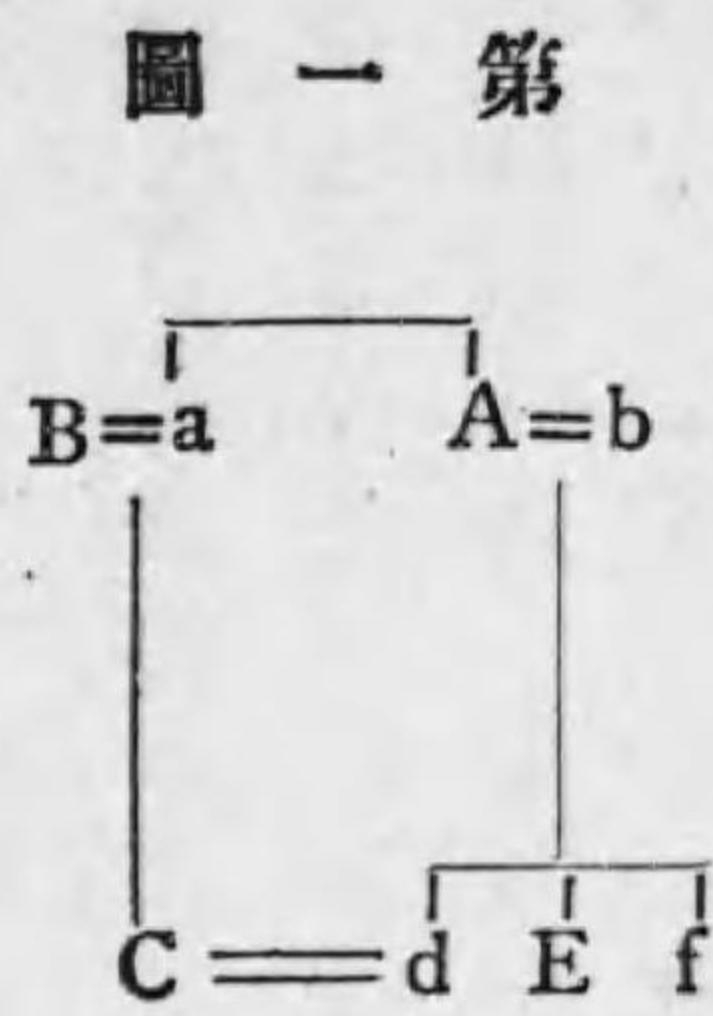
次にモルガンに對する第二の攻撃の當否を考へて見よう。即ち親族關係の言語の起源を社會狀態に求めずして、心理學に従つて説明せんとするものである。

吾人は先づ斯くの如き議論が生じて來た所以から説明する必要がある。世界のある一部で新しい現象を發見すると、同じやうな現象を他の部分にも求めやうとするのは極めて自然な傾向である。モルガンが生存して居た頃は丁度人性論者(Ethnologists)が人間文化の同一性と云ふことに就いて最も興味を有して居た時代であつた。従つて彼も亦此の影響を受けたことは疑を容れない。彼は全世界を通じて等級制度の同一性を認めようと思つた。而して是等の制度を研究して、是を人類社會の歴史の一階段とし

やうとするに至つた。而して彼自身の研究たる北亞米利加に於ける制度の種類も、印度人や太洋洲民の制度の相違等も輕々に看過してしまつたのである。かくてマツクレナンの攻撃をも受けるに至つたのである。然し等級制度の社會的重要さは直ちに認められるようになった。コラア(J. Kohler)は其の著書「結」の太古史「Zur Urgeschichte der Ehe」に於いて、モルガンに依つて無視された各等級制度の相違を細論し、更にそれ等の制度は其の制度を實行して居る各人種の結婚の形式に依つて説明し得ることを示した。以下論述に際しても大體是に従ふ積りである。即ち先づ最初に等級制度の相互の形式の相違を明かにする部分は、直接其の制度を實行する人種の社會的法制に依つて決定せらるゝことを明かにし、而して是が是認された後等級制度及び他の制度の社會的法制との關係を概論して見ようと思ふのである。

最も多く行はれたる結婚の形式は母方の兄弟と父方の姉妹、若しくは父方の兄弟と母方の姉妹、即ち從兄弟從姉妹の結婚であつて、實際多く是等の親族の一人を選ぶに限られて居た。斯くの如き結婚は確に一つの大きな影響が生ずる。今説明の便宜の爲めに是を圖に依つて説明しよう。

(大文字は男子、小文字は女子を示す、以下是に同じ)



Cとdと結婚した結果、如何云ふ關係が彼等相互の間に生ずるだらうか。そは圖の示すが如くCにとつて結婚前は單に母の兄弟であつたAが妻の

父となり、母の兄弟の妻であつたbが妻の母となる。同様なことがbに就いても云へる。又Bにもbにも新しい關係が生ずる。要するにすべての者に密接な關係を生ずることになる。而して斯くの如き結婚が各從兄弟從姉妹の間に行はれるとしたならば、各自の關係が尙は一層極めて密接になることは論ずる迄もないだらう。更に此の結婚制度が常則となるに至れば、母の兄弟と父の姉妹の夫とは同一人になる。同様に父の姉妹は母の兄弟の妻である。即ち第一圖に示すところに従つて説明するならばBとbとは同胞であるから、従つてAはCの母の兄弟であると共に父の姉妹の夫でもある。同時に又bは父の姉であり、母の兄弟の妻でもある。尙ほ母の兄弟は義父(brother-in-law)であり、父の姉妹は義母(Mother-in-law)である。即ち此の種の習慣に依つて母の兄弟、父の姉妹の夫、義夫、此の三つの親族關係が同一人に歸する譯である。同様なことが父の姉妹、母の兄弟の妻、義母に

就いても云へる。

今此の實例を擧げよう。フィジ(Fiji)のムボウ(Mbau)の方言では *vungo* は母の兄弟、父の姉妹の夫、義父を指す。*ngane* は父の姉妹、母の兄弟の妻、義母に用ひる。*tavale* と云ふ言葉は母の兄弟の息子、父の姉妹の息子、及び妻の兄弟姉妹の夫に用ひられる。*ndavola* は母の兄弟の子供若しくは父の姉妹の子供(話手の性の相違に依つて何れにかなる)に用ひられる許りでなく、話手が男性である時には其の妻の姉妹及び其の兄弟の妻を呼ぶ時に用ひ、話手が女性である場合には其の夫の兄弟及び其の姉妹の夫を呼ぶ際に使用される言葉でもある。

此のフィジ人の制度は敢てメラネシアのみに止まらない。ニュー、ヘブリド島(New Hebrides)の南方の島々タンナ(Tanna) エロマンガ (Erromanga) アネイテムム(Anaitum)及びアニワ(Aniwa)等に於いても同様の例證が擧げられる。然しこゝに一々列記する餘裕がないから、直ちに斯くの如きメラネシアの制度が心理的の親密性に依つて果してよく説明し得るか如何かに就いて考究して見よう。若し従兄弟従姉妹同士の結婚と云ふことが事實ないとしたならば、義父と父の兄弟、義母と母の姉妹と同一の親密さを有し得るだらうか。又従兄妹同士相互の親密さは如何。假りに従兄妹の結婚制の存在して居る場合を考へて見よう。確かに其處に心理的親密さはあり得る。然し吾人は尙ほ此の心理的親密さを重要視するわけにはゆかない。何故ならこゝに云ふ親密の程度は單なる二つの親族關係を表示するのではなくして、全く同一人を示すのであるからである。よしんば其の心理的親密さを假りに許容するとしても、其の親密の依つて生ずるところが、従兄弟の結婚にありとするならば、親族關係の言葉が社會的に少しも影響されないと云ひ得るだらうか。少くとも斯くの如き事實の存在するこ

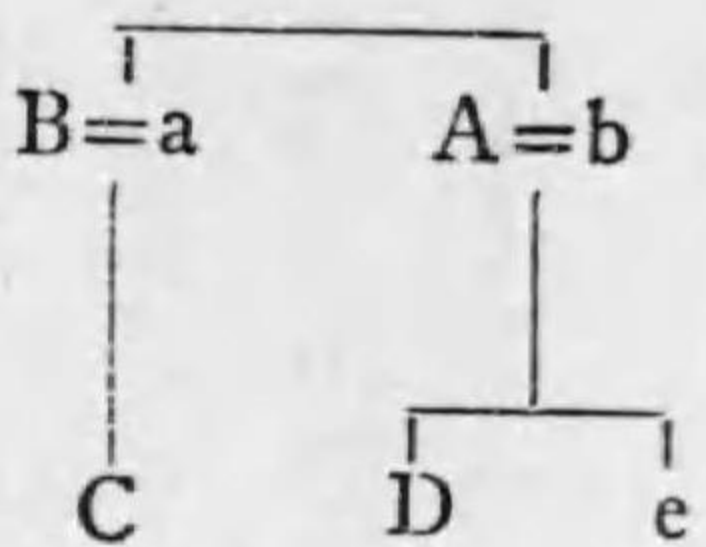
とは、即ちある一定の社會制度を基礎として、其處に親族間の特種の關係を表示する等級制度の言葉が生じたのではないだらうか。

四

次に更にメラネシアの結婚制度の他の形式を考察することに依つて等級制度に使用される言語が社會状態に依存することを明白にしよう。

コドリントン博士(Dr. Codrington)の報告に依ればバンクス島の親族關係は甚だ特徴のあるものである。(Codrington:—"The Melanesians," p.38) 簡單に云へば従兄弟同士の結婚が互に親子の關係に立つのである。即ちある男が其の母の兄弟の息子に對して、他ならば自分の息子に用ひると同じ言葉を以つて呼ぶのである。圖を以つて説明すれば、第二圖に於いてCはDとe.とに普通ならばその息子、娘に對する言葉を用ひ、Dとeとは外ならば父

第二圖



を呼ぶ言葉をCに適用する。普通の等級制度にあつては、違つた時代の者に對して違つた言葉を用ひ、違つた階級に屬せしむるのであるが、此の場合には話手と同時代の者を、或ひはより古き時代の者と、或ひはより若き時代の者と、同一視するのである。

先づ斯くの如き場合、如何なる心理的親密さが斯くの如き稱呼を生ずるに至つたのであらうか。恐らく明確なる解答を得ることは甚だ困難であらう。轉じてバンクス島に住む人の實際社會の慣習を観察して見よう。コドリントン博士の聞いたところによると、ある一人の男が其の母の兄弟の妻の一人と結婚することがあるとのことである。更に此の結婚の形式は嘗つて以前に此の島に流行した許りでなく、今尙ほ多少變つた形式で

行はれて居るとのことである。即ち昔の母の兄弟が多くの妻を有つて居たので、従つて其の一人を妻としたのであるが、今は母の兄弟の寡婦と結婚するやうになつたのである。(Codrington:—op. cit. p. 384) 即ち此の島に於ける特種の言葉は斯くの如き結婚制度より生じたものと云へるだらう。若し第二圖に於いてCがbと結婚したとするならば、叔父の子供たるDとeとは必然親子の關係に立つ譯である。

次に親族關係の等級制度の社會的意義を更に明確にする爲めに、北ニユー、ヘブライド諸島中のペンテコスト(Pentecost)の島に就いて述べよう。此の島の親族關係の表示は甚だ複雑であつて、且つ著しい特徴があるので、殆ど事實と信ぜられない位である。然し多くの別々に調査した結果を合せて見ると全く同一であつて信ずるに足ると思ふ。其の特徴は二時代に別れて居る親族を一つの範疇を以つて表現するのであつた。例へば母の

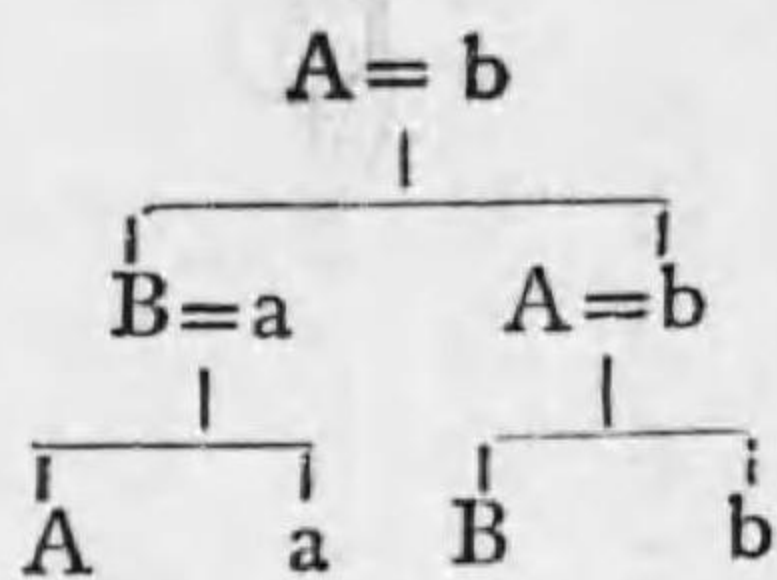
母は姉と同じ稱呼を以つて呼ばれた。又妻の母は娘と同じく、妻の兄弟は娘の息子と稱せられた。今先づ結論から云ふと、此の不思議な特徴も要するに亦社會的結婚制度の結果であると斷定する。

リパースが同島に於いて發見したところのものは此のことを裏書するものである。即ちある男が其の母の兄弟の妻と結婚する。そののみならずペンテコストの制度に依れば此の種の結婚を重ねてすることが出来るのである。ペンテコストの此の特種の形式を二個の方面から説明することが出来るだらう。即ち第一は母の兄弟の妻と結婚すると云ふ事實に依つて説明されるのである。而して其の稱呼は話手と同時の者であると否とに論なく共通に使用されるのである。第二に時代を異にした者が互に同時代の親族を區別する言葉から成立する。そこで此の兩方が共通になると、第一に一時代を隔てた人々の結婚に依つて説明されたのであるから、二

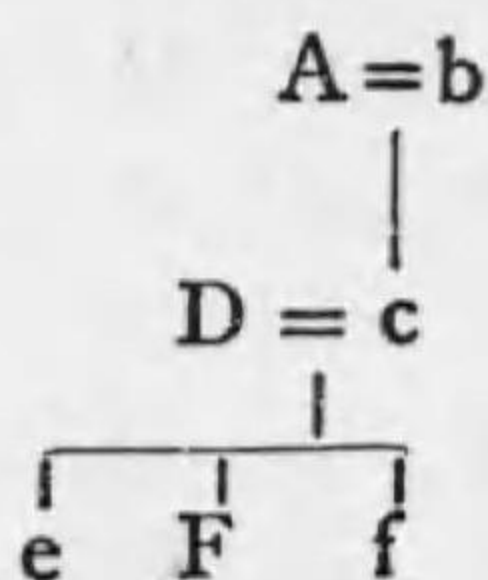
時代離れた人々を一つの階級に區別することになり、従つてこゝに二時代離れた人々を同一稱呼で呼ぶやうになつたのである。斯くの如き二時代離れた人々の結婚、云はゞ祖父母と孫との結婚が行はれるやうな社會の觀念は多少普通のものとは異ならなければならぬ。此の社會の觀念を知る手掛りとも云ふべきものはジョン・パンテユタン(John Pantutun)と稱するパンクス島の一土人から得られた。彼はパンテユタンに於いて教師をして居た。彼は屢々自分の島とペンテユタンとの慣習の相違を物語つたが、ある日彼は「オー、ラガ。(Raga)(ペンテユタン島のこと)そこは孫娘と結婚する場所です」と告げた。斯くてこゝに疑問となるのは結婚する孫娘の種類であつた。息子の娘か、娘の娘かと云ふ問題である。然し此の疑問もペンテユタンの社會組織の性質を調ぶるに及んで明白になつた。

此の島の社會は二つの基礎の上に成立する。其の基礎はある男が其の反對側のある女と結婚しなければならぬと云ふ母系統を伴つて居るのである。第三圖に於いてAとaとは同一側の男女であり、Bとbとは他の

第三圖



第四圖



側のものであるとする。例へば此の圖の如き場合、ある男と其の息子の娘との結婚は同一の側に屬するから問題とならない。即ちAがaと結婚するのでは同じ母系統である。従つて此の際は娘の娘と結婚すべきことになる。

更に是等のことを一々説明して居ると甚だ煩雜になるから、第四圖に示した例に従つて論述しよう。此の圖は次ぎの如きことを示して居る。即ち若しAがeと結婚したならば、結婚前まではAの娘であるcが其の妻の母となる。娘の婿たるDは妻の父である。同様にAの娘の息子たるFは妻の兄弟に、娘の娘たるfは妻の姉妹になる。最後に逆に考へれば此の結婚前にはFとfとの姉であるeはAと夫婦となることに依つて、母の母となる譯である。

以上の記述をなしたる後、こゝにペンテコストの言辭に就いて調べる必要がある。妻の母及び娘は共に *mitu* と呼ぶ。娘の夫と妻の父とは何れも *bvailiga* であつた。娘の子供は *nabi* と呼んだが、此の言葉は亦妻の兄弟姉妹にも用ひられる。最後に母の母は姉と同じく *tuaga* と呼ばれた。

叙述を簡單にする爲めに、ある男が其の娘の娘と結婚すると假定するこ

とにした。然し等級別の原則に依つて、其の男の兄弟の孫娘と結婚した場合も同様に云へるのである、斯くの如き場合には又共通な點が惹起する。即ち夫の兄弟と母の父とを共に *mitu* と稱したのである。是は自身の孫娘と結婚する時は生じない筈であるが、兄弟の娘の娘と結婚すれば、斯くの如きは極めて自然な結果である。即ちAの兄弟がeと結婚した場合である。而して恐らくペンテコストの結婚は娘の娘を妻とするよりも、兄弟の娘の娘を妻にする方が多かつたのであらう。ジョン・バンテユタン以外のあるペンテコスト人の云ふところに依ると、自身の孫娘との結婚は禁ぜられて居て、唯兄弟の孫娘にのみ許されて居るさうである。而も今尙ほ現にその風習が存在して居ると云ふことである。此の事實は更に濠洲のデイリ(Die Die)に於いても存在して居たとのことであるが、こゝには煩しいから省略する。(Howitt:—"Native Tribes of South East Australia," pp.164,177)

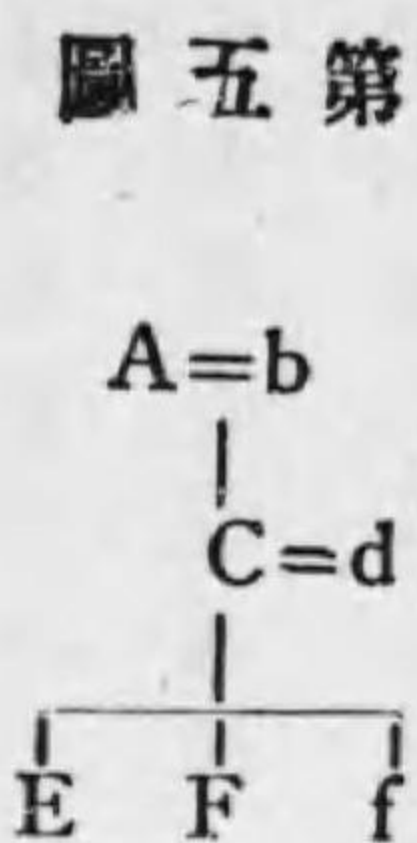
斯くの如き事實が如何にして心理的に説明することが出来るだらうか。祖母と姉妹、義兄弟と祖父、是等の間に心理的類似があるだらうか。特別な社會の親族關係を離れては何等の類似をも認められないだらう。よし斯くの如き心理的類似があつたとしても、それならば何故ペンテコストやドイツに限つて言語上に現れて來たのか。斯くの如きは唯其の特異の社會状態が存在して居たといふ事實に依つて説明し得るのみである。

吾人は以上の論述に依つて等級制度の特種形式が特種の社會組織に基づくことを明白にした上は、更に一步を進めて如何なる程度迄、現に存在して居ない社會制度を、其の制度の結果とする親族關係の言辭の内に發見して是を確實になし得るかといふ問題に就いて少しく論じなければならぬと思ふ。

五

フィジ諸島の一つビイチ、レブウ(Viti Levu)の内部に從來知られて居たフィジの制度と根本的に相異して居る親族關係のある制度が存在して居た。そこには従兄弟同士結婚制度の特徴は少しもなかつたが、すでに述べた二代(tow generation)離れた親族を一つにする制度があつた。即ち父の父は兄弟と同じ稱呼を、息子の妻は母と同一に呼ばれた。こゝに注意すべきは前に述べたペンテコストのそれと呼び方の相違する點である。即ちペンテコストのは母系的であるし、これは父系的である。如何して此の差別が生じたのであらうか。此の疑問の消極的な解決の一つがタアンワルド博士(Dr. Thurnwald)の研究したブウゲエンビエウの島(Bougainville)の内ブイン(Buin)の制度から得られた。(Zeitsch. f. vergleich. Rechtswiss., 1910, xxiii., 330) 此の所の制度

に依れば稱呼はフイジと同じく父の父が兄と同一ではあるが、其の制度自體はペンテコストと同じく母系的である。これに依つて見れば斯くの如き稱呼の區別は母系的子孫、父系的子孫の差違から生じたものでないことは明かである。他に何等かの原因がなければならぬ。斯くの如きは恐らく社會組織の形式如何に依る必然的結果ではないだらうか。祖母即ち父の父の妻と結婚すると云ふことが實際に行はれ、息子の妻が母と同一になることがフイジの制度の特徴であつたのではないのか。



第五圖に於いてEがbと結婚すればFとfとの兄であつたEが父の父となり、Eの母のbは息子の妻の地位に立つ。

こゝに此の結婚の方法に依るブインの制度を考察する。manai と云ふ言葉は姉及び兄の妻に用ひる許りでなく父の母に用ひる。このことは實際若しある男が其の生存中に妻の一人を孫に與ふるか、若しくは女が寡婦になつた時、夫の孫と結婚する制度が存在すればいゝ譯である。斯くの如き制度が果して存在して居たか如何かは、バンクス島やペンテコスト等の實際から推斷するより外はない。そは兎もあれ吾人は前節の終に述べた疑問を解決するに當つて、先づ是等の言辭と結婚制度と果して關係があるか如何かを明かにしなければならぬ。

先づ例を従兄妹同士の結婚にとる。従兄妹同士の結婚から生じた特徴と思つて居るものゝ内、あるものは他の結婚制度の結果かも知れない。例へば世界のある部分に於いては兄弟と姉妹とを交換する習慣が存在して居る。さうすればある男の姉妹は彼の妻の兄弟と結婚するやうになる。

此の慣習の結果として母の兄弟は父の姉妹の夫、又父の姉妹は母の兄弟の妻である。此の結婚の形式はトオルス海峡(Torres Straits)の西部の人々の間に行はれた。(Rep. Cambridge Expedition to Torres Straits, vol. v, pp. 135, 241) 即ち母の兄弟は父の姉妹の夫と同じく wadwam と云ふ。然し父の姉妹の夫には他に代るべき言葉がある。そして母の兄弟の妻が父の姉妹と同一人であった證據はなかつた。母の兄弟と父の姉妹の夫とが同一區別を受けたのは親族制度の特徴ではなく、交換の習慣から必然生じたもの、やうに思はれる。兎に角從兄妹同士の結婚制度から生ずる兩者の一致は時に他の結婚の結果かも知れないと云ふことは明かである。然し乍ら交換の習慣から來る言語上の一致の存在するものも、それ以前に從兄妹同士の結婚の存在を推知し得る理由が存在して居る場合である。そこで結論を述べると第一は從兄妹同士の結婚に伴ふて發見された特徴のあるものは、現在存して

居ない從兄妹同士の結婚の過去に於ける存在を推知し得る爲めに、他のものよりも大なる價值を有つて居る。次に第二に吾人が從兄妹同士の結婚の過去に於ける存在に歸する斯くの如き特徴は、若しも此の制度が類似の文化を有する人々の間に存在して居るならば、尙ほ一層強められると云ふことである。是等の點はメラネシアの例に依つて明かである。ソロモン諸島(Solomons)のフロリダ(Florida)に於いて從兄妹の結婚は今も存在して居ないが、過去に於いて存在して居た蹤がある。即ち妻の母と母の兄弟の妻とを共に vungo と呼ぶ。且つフロリダは從兄妹同士の結婚の存在して居るグアダルカノル(Guadalcanor)の近くにある許りでなく、其の文化状態も又甚だ似て居る。斯くの如き場合にフロリダに於ける此の制度の存在はかなり確實になる。更には是等兩島の附近にあるイサベル(Isabel)に於いて此の制度は今も時々行はれるに過ぎないが、更に確實なる蹤を發見したること

に依つて一層確實になる。其の他斯くの如き實證は數多擧げることが出来るけれども、今は煩はしいから止めにする。

他の結婚の種類、即ち以前に述べたペンテコストに於ける娘の娘との結婚、及びフイジとビュインに於ける祖父母と孫との結婚に就いて同じやうな穿鑿をなした。決定的のものは得られなかつたけれども、斯くの如き結婚制度が以前に存在して居たと想像し得る材料は其處此處に發見し得た。然し乍ら是等の例證も煩雜であるからこゝには割愛することとする。

之を要するにある場合には古代に於ける結婚制度の存在が親族關係を示す言語の内に存する名残りから推知し得る。他の場合文化が相違するか、若しくは直接の連關が缺けて居る時、其の言語上の特徴を生ずる古代の結婚形式の存在を推測するのは正當ではない。更に他の場合が是等兩者の間に介在することがある。例へば結婚の形式を推知し得る證據が文化の類似の程度、距離、及び其の結婚の形式に關係ある文化の特徴の有無等に依つて變ずる場合である。然し乍ら其の推斷が最も疑はしい場合でも吾人は獨斷的に親族關係の言語の起源が社會狀態の内にあることを否定することは出来ない。

六

以上吾人は親族關係の言語と結婚の形式との關係に就いて論述した。勿論結婚の形式は親族關係の言語を形成するに至つた社會組織の一部分に過ぎない。然し乍ら是と最も密接なる關係を有するものであることは疑ふことが出来ない。次ぎに以下是等の言語が直ちに結婚の形式の結果として生じたのではなく、結婚と關係のある他の社會制度に對する態度の結果から生じたものに就いて少しく述べようと思ふ。

ポリネシアとメラネシアとに於いて義父を父と、義母を母と、義兄弟を兄弟と、義姉妹を姉妹と、同一にすることは稀ではなかつた。太平洋の親族關係の言葉は二つの特徴がある。其の言語は屢々義兄弟や義姉妹の違つた種類を嚴別する。而して若しもある種類の義兄弟義姉妹が眞の兄弟や姉妹と同一にされて居れば、吾人は區別の依つて生じた過程を知るよすがとなる。第二の特徴は常に性を異にした親族關係に依つて言語が違ふことである。男同士の親族を女同士の親族と違つた言葉を用ひるのである。更に以下此の二つに就いて詳述しよう。

太平洋の親族關係の言葉に就いて注意すべき第一の點を詳細に云へば、すべての義兄弟義姉妹を兄弟姉妹と同一に見做すのではなくして、唯異なつた性の者のみであることである。例へばバンクス諸島のマアラフに於いて唯妻の姉妹、及び其の男の兄弟の妻が姉妹と同じく、夫の兄弟、及び其の

女の姉妹の夫は兄弟と同じであるが、其の他吾人が義兄弟義姉妹と呼ぶ者と雖も他に特別の言葉が存在して居る。同一の状態がメラネシアでは一般になつて居る。若しもクロウベル教授の想像する如く、義兄弟を兄弟と同一にすることが心理的類似に歸するならば、吾人は此の類似が何故違つた性の者の方が同一の性の者よりも、より大であるか、發見されなければならぬ筈である。

今吾人は先づバンクス諸島に就いて研究し、而してマアラフに於ける社會狀態を他島のそれと比較するならば、ある男と其の妻の姉妹、其の兄弟の妻との間に性的關係が以前存して居たこと、又是等の親族と姉妹と同一にすること、斯くの如き性的關係の中止との間に一定の聯絡あることを示す證據を發見することが出来る。メラネシア人の如き人間が其の妻の姉妹との間の性的關係を誇張して表示しやうとするならば、是等の親族を姉

妹と同一階級にするのが最も適當な方法であらう。斯くの如きこと、即ち嘗つて習慣となつて居た性的關係を云ひ現はす社會的必要から共通な言語が生じたことに關する證據は南メラネシアに數多發見することが出来る。

次ぎに上述せる第二の特徴は如何にして共通の言葉になつたかを語るものである。即ちある男が彼の妻の妹を、彼自身が其の妹に用ひると同じ言葉を以つて呼ぶことはない。妻の姉妹の一人が他を呼ぶ言葉を以つてする。換言すればある男は彼の妻の姉妹に向つて彼の妻が是等の血族に對して用ひる言葉を使ふのである。かく妻の姉妹に對して、其の妻が用ひると同一の言葉を使ふことは何を意味するだらうか。勿論心理的要素が重要な部分を示めて居ることは云ふ迄もないが、斯くの如き心理的要素も元は社會的過程から生じたものである。即ち其の社會的過程とは性的

共産主義[○](sexual communism)の状態から次第に結婚者相互のみの性的關係にと轉化してゆく途筋である。

此のことは又次ぎのやうな疑問を惹起するだらう。即ちクロウベル教授が親族關係の言語の心理的原因の一例として擧げた吾人自身の社會に於ける習慣と如何して同一でないのであらうか。義兄弟と兄弟、義姉妹と姉妹、是等の區別が吾人自身の中に於いて社會組織に影響しないと云ふことはクロウベル教授の考ふるが如く確實であるだらうか。斯くの如く吾人自身の言語とメラネシアのそれと違ふことに關しては、後者に於いて死者の妻の姉妹と結婚すると云ふ事實があることを指摘すれば十分であると思ふ。従つて上に述べた言語の相違が惹起するのである。即ち歐洲に於いては一般に弟妹が嫂や姉婿と結婚するのは不倫の行爲とされて居る。故に兄弟と義兄弟、姉妹と義姉妹との言語の相違が存するのである。

七

今までは等級制度中の比較的僅な變化に就いてのみ論じた。以下更に等級制度の主たる變化が果して社會狀態に依存するか如何かに就いて少しく考察しよう。先づモルガンがマライヤン(Malayian)と名づけたものを研究しよう。此の名稱は適當な言葉ではない。此の種類はハワイ諸島の言語を通じてモルガンに知られたものであつて、是等の島々の制度として最初に記録されたものであるが、又今でも最も完全なる記録とされて居るから、此の制度を例證として述べようと思ふのである。若しも此のハワイの制度を太平洋の他の部分、濠洲、印度、亞弗利加、及び亞米利加等の等級制度と比較するならば、極めて單純であること、言語の尠少なること、が、其の特徴であることを知る。父の兄弟と母の兄弟、父の姉妹と母の姉妹、兄弟の子

供と姉妹の子供と兄弟姉妹間の子供、是等の區別は通常の等級制度には存在するのにも拘らず、こゝには全然缺如して居る。此の言語の缺如が社會的要素に依存して居るか如何か、こゝに於ける問題である。

注意すべき第一の點は太平洋に於いてハワイ人の等級制度と他の普通の等級制度との相違が、ポリネシア人とメラネシア人との間の相違に相當して居ないと云ふことである。即ち制度の相違と種族の相違とは何等相關係するところがない。

次に若しも吾人がメラネシア人とポリネシア人の制度を全體として取るならば、二つの部類に嚴別することは出來ないが、兩者の間に次第に轉化した中間の部分が存して居ることを知る。故に劃然と區別することは出來ないが、順次に併列することは出來る。こゝに於いて生ずる疑問は太平洋に於いて親族關係制度の二種を結合する一系統に平行して更に他に

社會組織の變遷の系統が発見することが出来るか如何かと云ふことである。疑もなく此の疑問に對しては積極的に答へることが出来る。

廣く云へば太平洋洲に於いて社會組織に二つの重なる種類がある。一つの種類に於いて結婚は一門(clan)中の異族結婚(exogamy)の一種に依つて定められ、他の種類に於いて結婚は血族、若しくは一家系の親族に依つて定められる。吾人はメラネシアに於いて全然一門異族結婚(clan-exogamy)に依つて定めらるゝことを発見することは出来ないが、然しメラネシア及びポリネシアの社會で家系的親族關係の原則(the principles of genealogical relationship)が結婚制度の決定要素であり、それ等の多少の程度に依つて一系統に排列することが出来る。其の系統の一端にバンクス諸島、北ニュー・ヘブライド島、及びサンタ・クルツ諸島(Santa Cruz Islands)を置く。是等の地方ではコドリングトン博士の認めたやうに部族組織(clan-organization)が殆ど機械的になつ

て居る位明瞭に重要なのである。他の一端に置くべきものはハワイ諸島やエッディストーン島(Eddystone Island)である。是等の地方では部族組織は殆ど発見されず、結婚は全然家系的親族關係に依つて制定される。此の兩者の間には尙ほ種々なる場合が存して居る。斯くして形成される系統は等級制度の相違せる形式間の變遷と相平行する。此の兩者の内部族組織に依る結婚制度を発見し得ないのはハワイ諸島とエッディストーン島である。是等の場所はモルガンがマライヤン制度と云つた特徴を有するものである。唯ある點に於いてエッディストーンの制度はハワイのとは違ふ。母の兄弟は父と同じ言葉の内に含まれたが、姉妹の子供に對しては一つの言葉があつた。然しそれは極めて稀であつたことは疑がない。ソロモン諸島のあるところでは部族組織が維持された。然し家系的親族關係が結婚制を支配して居た。此の外種々なる程度の相違が存在して居るが、是等の變

化の本質や、違つた言語形式を用ひる人種の文化との關係等は太平洋洲に若起された進歩の變化を示すものである。此の地方に於いて等級制度は上述せるペンテコストのやうな複雑なものから、エツディストンやメケオ(Mekoo)のやうな簡單なものまで存在して居た。此の過程は部屬組織に依る結婚制が次第に家系に依る方法に基く機械的手段に代つてゆく經過と相平行するものである。

此の結論が許されるならば、親族關係の等級制度の内、更に一層一般に普及してゐる種類は異族結婚的社會團體を其の單位として居る社會組織と密接なる關係を有することゝなる。等級制度と異族結婚的社會團體と關係あるところは、何處でも、親族關係の言葉が家系的に辿ることの出来る親族に止まらず、其の時代の一門のすべての者に適用される。例へば「父」と云ふ言葉を其の父のすべての兄弟に、其の父の父の子供の子供に、更に父の

父の父の子供の子供の子供等に用ひる許りでなく、其の時代の父と同一階級に位するすべての者、及び母と同一階級に位する者の夫をすべて「父」と云ふのである。此のことは母に就いても同様である。其の間に家系的關係の有無を論じない。是等の等級制度の特徴は其の根柢に異族結婚の存在を認めさへすれば、別段不思議ではないのである。此の制度を特に等級制度と區別しようと思ふなら、部族制度(clan system)とも名付くべきであらう。

上述の如く其の起源に於いて等級制度と異族結婚に基く社會組織と密接なる關係がある許りでなく、其の細い部分に於いても同様である。例へば父の兄弟と母の兄弟と嚴別するが如きことは異族結婚たるに基くものに外ならない。

更に異族結婚的社會團體に其の起源を有する等級制度のある特徴がある。普通二重制度と云はるゝものであつて二つの社會團體に限られたも

のである。此の場合一般に兄弟の子供は姉妹の子供と同一である。母の姉妹の子供と父の兄弟の子供と同一の言葉を以つて呼ばれ、而して此の言葉を使用すると云ふことは彼等相互の結婚禁止を意味するのである。斯くの如きことは二社會團體以上よりなる社會制度からは生じない。若しも社會が父系的であるならば二人の兄弟の子供は必然的に同一社會團體に屬する。従つて異族結婚の原則に依つて彼等相互の結婚は嚴禁される。然し其の團體の婦人が他部族の者と結婚したとするなら、異族結婚の原則に依つてそれ等兩者の子供、即ち其の女の兄弟姉妹の子供と其の女の子供とは結婚を禁せられもしなければ、又彼等相互に共通する言語の存する理由もない。母系的である場合にも同様に説明することが出来る。

然し乍ら若しこゝに二つの社會團體より外に存在しないとすれば、大分違つた現象を生ずる。其の父系的であると母系的であるとに依つて相違は生じて來ない。即ち二人の兄弟の子供、若しくは二人の姉妹の子供は同一部族に屬するのであるが、兄妹の子供若しくは姉弟の子供は違つた部族に屬する。同様に二重組織の必然的結果として母の兄弟の子供は父の姉妹の子供と同一に分類されるが、若し二つ以上の社會團體が存するならばこれは必然ではなくなる。

以上の論述に依つて大體等級制度に關する吾人の研究は目的を達したものと考へる。以下尙ほ斯くの如き制度と吾人の制度とを比較し、更に複雑なるものに論及し、それ等が如何なる傾向を有するものであるかに就いて概論したいと思ふ。

八

野蠻人の間に於いて民族や異族結婚的團體が社會組織の單位であるが

如く、吾人の間に於いては家族が其の單位である。こゝに家族と云ふのはある男と其の妻及び彼等の子供を含むに止まる。若しも吾人が其の親族關係の言語を研究するならば、それ等の言葉が一個人に對して適用され、且つ家族と密接なる關係を有する者に限つて居ることを知る。父、母、夫、妻、兄弟姉妹と云ふ言葉は話手の家族に限られ、義父母、義兄弟、義姉妹が話手の妻若しくは夫の家族に限られて居る。祖父、祖母、孫も同様である。伯父、伯母、甥姪は多少廣い範圍に用ひられるけれども、それとても其の話手の家族に密接の關係ある者に限られて居る。然らば吾人が何時頃から斯くの如くなつたか云ふ問題は極めて解決に困難ではあるが、少くとも吾人の自覺の漸次發展して來たことに基くものであると云へよう。これ以上こゝに説明する必要はない。

兎に角現在一般に知られて居る此の制度をモルガンは説明的制度 (descriptive system) と呼んで居る。此の名稱は一般に通用するが、然し乍ら必ずしも適當ではない。各一人一人に適用することを説明的 (descriptive) と云ふのは勝手であるが、穩當であるとは云へない。此の點を看過するとしても尙ほ吾人は父の父も、母の父も共に祖父と呼んで居る。従つて等級制度よりも必ずしも説明的であるとは云へない。唯程度の相違のみである。故にかゝる不適當な文字を用ひるよりも、寧ろそれが家族に基くものであるから家族的制度 (family system) と云ふ方が適當であるように思ふ。

又他方から見ると吾人の制度より一層説明的なものは甚だ多い。今煩雜であるから一例を擧げるに止める。エジプトに於けるアラビヤの制度は極めて説明的である。父の兄弟を 'amm と云ひ、父の兄弟の妻を mirat 'amm と云ひ、父の兄弟の息子を ibn 'amm、娘を bint 'amm と云ふ。

斯くの如き説明的の言語は如何にして生じたのであるか。これ亦社會

的原因に基くべきものである。今こゝに例として挙げたエジプトに於いて父の兄弟の娘、若しくは母の兄弟の娘との結婚が最も普通に行はれて居た。斯くの如き結婚の結果、其の親疎の程度に従ひ他の従兄妹と區別する社會的必要が生じ、其の社會的必要がこゝに説明的の言語を生じたのである。

尙ほ幾多の例證を擧げることには出來るが、こゝには省略する。要するに親族關係の發展すると共に、社會組織の必要上からこゝに説明的の言語が生じたのである。即ち大家族、若しくは族長的家族 (Patriarchal family) に依る社會組織に基くものである。此の種類の言語は歐洲に於いて數多く發見することが出来る。セルチックやスカンディナヴィヤ人 (Scandinavian) の中、リシウエニア人 (Lithuanian) 及びエストニア人 (Estonian) の中にも存在して居る。

以上述べて來たところを要約して置かう。最初吾人は等級制度の特別

の特徴が結婚の特別なる形式に關係あることを述べた。次ぎに等級制度の更に複雑な變化が社會組織の違つた形式、並びに部族の異族結婚が次第に家系的結婚に變じて行くその程度に依つて生ずることを説いた。更に吾人自身の親族關係の言葉は以上のものとは違つて、家族を基礎とするものであることを明かにした。斯くして吾人は次いでエジプト等に於ける大家族に就いて一瞥した。此の三種は各々氏族、狹義の家族、族長的家族を其の起源とするものである。是等の三種は更にその各々の發達の程度に依つて、各自に多少の相違を來たして居ることは免れないが、然し乍らそれ等のことよりも更に一層重要なことは、等級制度を有する人々にあつては、家族を社會單位とする人々より、複雑な社會制規、殊に厄介な結婚の形式を有して居ることである。

九

吾人は以上に於いて大體親族關係と社會組織との關係を觀察し終つた。最後に此の問題に關聯してモルガンの述べた雜婚に就いて一瞥するものも無益であるまいと思ふ。

モルガンは人類の古代に於ける雜婚制度をハワイ制度から歸納した。然しハワイの制度が最も古く原始的であると斷定することは出來ないし、且つ此の地方に於いて男女混交は全人民の状態ではなく、極めて一部分、兄弟姉妹の結婚を許可する首長のみが許されたに過ぎない。尙ほ等級制度のあるものから、モルガンの斷定したような男女混交の事實を證據立て得る材料は存在して居ない。

是と關聯して居る團體結婚に關しては少くとも二つのことを注意する

必要がある。第一は團體結婚と云ふのは性的關係が一つの社會團體の男と他の社會團體の女との間に正統として認められるのである。故に團體結婚と云ふ言葉は混雜を招き易いから寧ろ性的共產主義 (sexual communism) と云ふ方が適當であると思ふ。第二に等級制度は必然的に性的共產主義の状態から生ずる二三の特徴を有して居る。等級制度の普及は此の共產制度を一般化するが然しこれが人類社會の進化に於ける最初の階級であるとは云へない。

吾人は以上の研究に依つて如何なることを教へられたか。吾人が時に無稽であるとか、あり得べからざるものと思考するものも、是を實際状態に就いて十分に考察すれば、決してあり得べからざるものでも荒唐なものでもないことを知つた。故に研究には更に多くの證據を探求する必要がある。次ぎに心理學は社會研究に於いて極めて重要であることは勿論であ

るが、それは心理的見地から離れて觀察し得る社會の諸構造の附隨物たるに過ぎないと云ふことを知つた。

然し最後に古代の結婚制度が如何に個人を無視するかを知り、更に個人の種々なる行動も其の個人の存在する當時の社會組織と最も密接なる關係あることを知つた。個人は社會の羈束を受けなければならぬ。換言すれば社會は個人に對して強制力を有するものであり、個人は社會から意識的に或は無意識的に強制されるものである。

第二章 社會の強制力上

吾人々類の生活が社會組織を中心とすることは改めて云ふ迄もなく、すでに論じたところであるが、個人の生活は社會に於いて、且つ社會に依つて始めて成立することが出來得る。社會を離れて個人は生存し得ない。こゝに於いて個人對社會の問題が惹起されるのである。が、若し各個人にして全然社會に無意識的に服従して居て、少しの個人性をさへ發揮しないとするならば、そこに何等の問題と云ふべき問題も起り得ないだらう。然るに、ある個人の服従が意識的であるか、若しくは社會と相齟齬するやうな個人

意識を有する時には、明かに社會の強制力を意識する。此の社會の強制力とは何を意味するのかわ。人類が未だ原始の状態にあつた時の社會の強制力と、現代文明人の意識する社會の強制力との間に、何等相違する點はないだらうか。人類文化の發展、換言すれば個人の自覺の變化と、社會の強制力の變遷とに關して、少しく考察を施さんとするのが、此の章の目的である。

社會の強制力に就いて論及する時は、何人とも雖も佛蘭西の社會學者エミール・デュルケム(Emile Durkheim)の名を想起するだらう。此の點に關するデュルケムの功績は、没すべからざるものがある。故に今こゝに社會の強制力を論ずるに當つても、先づデュルケムの學說を一瞥するのが至當であると思ふ。デュルケムの著作は數多あるが、其の重なるものは左の四つである。

(1)「社會勞働分業論」"De la division du travail social" (1893)

(2)「社會學方法論」"Les Regles de la Méthode sociologique." (1895)

(3)「自殺論」"Le Suicide." (1897)

(4)「宗教的生活の原始的形式」"Les formes élémentaires de la vie religieuse." (1912)

以下論述に當つては、主として「社會學方法論」及びデュルケム研究の好著チャールズ・エルマー・ゲールク(Charles Elmer Gehlke)の「社會學に對するデュルケムの貢獻」"Emile Durkheim's Contributions to Sociological Theory." (Columbia University Studies in Political Science. vol. LXIII. No. 1.)に依る。デュルケムの說に従へば社會事實(fait social)は唯社會的にのみ説明し得るもので、外的(exteriorité)であること、強制的(coercitive)であることを特徴とし、個人的表現(manifestations individuelles)とは全く獨立のものである。以下斯くの如きデュルケムの強制力説を詳述するに先立つて、簡単に氏の心理學並びに其の重なる術語の意義を明白にする必要があると思ふ。

二

先づ社會 (société) とは何を意味するのか。此の語に關するデュルケムの説明は極めて曖昧である。然し大體に於いて氏が *société* と云ふ言葉を使ふのは、一般に社會を指すのでなくして、人類の具體的集合 (aggregate) を意味する一社會 (a society) を云ふのである。此の aggregate は社會的政治的單位を意味するのであつて、即ち其の原始的時代にあつては、*horde* であり、*clan* であり、*tribe* であり、*cofederation* である。我が國の小氏大氏は是に當る。更に後代に於ける都市、國民、及び國家と同じものである。(Gehlke:—op. cit. pp. 189.)

次に明かにする必要があるのは「心」(l'esprit) である。彼は定義を下して、心それ自身はそれを形成して居る現在及び過去の表現 (representations) である。」と云つて居るが、更にデュルケムの社會心及び個人心を明かにするには、先づ彼の心理學の概略を知らなければならぬ。今ゲールクに従つて其の極めて概略を紹介すること、しよう。デュルケムは自動論 (automatism) も並行論 (parallelism) も共に排斥して居るが、心と腦髓 (mind and brain) に關しては相互作用主義者 (interactionist) である。彼の見地に從へば精神的過程は大部分感情的、意思的であるよりも寧ろ表現的である。表現は意識の範圍内にあらずして、意識外 (extra-conscious) に於いて存立するものである。而して最も重大なることは、表現は更に原始的なる心理的單位の積分 (integrations) であり、更にそれ自身も亦一層高い合成 (compound) に結合するものであると云ふことである。(Gehlke:—op. cit. p. 27) 此の立脚地に立つて彼の個人心と社會心との關係は極めて明瞭である。個人心の表現は心的要素の複合である。其の心的要素の結局は感覺 (sensation) に於いて決定される。而して

感覺は腦細胞 (cerebral) の相互作用に依つて生ずる。勿論各感覺がどれか一つの細胞の所産であるなど云ふことは出来ない。従つて表現は、腦細胞其のものゝ内にある譯ではないが、腦細胞に依つて成立すると考へられる。此の思考法は更に社會心にも適用される。少しく煩雜ではあるが、此の點に關する彼の議論を今少しく引用する。社會は其の實體としては結合せる個人の全部である。個人の結合に依つて形成された系統システムが社會生活を生ずる基本となるのである。其の系統は明かに各個人の數、其の住居する地位如何、其の交通聯絡の度數、及び性質等に依つて變化する。而して此の社會の緯とも云ふべき表現は斯くの如く結合せる個人間、若しくは個人と社會全體との間に挿入する團體間に立てられたる關係から生ずるものである。すでに述べたやうに個人的表現は神經要素の相互作用に依つて生ずるものであるが、其の神經要素其のものゝ内に固有して居るもので

ないと云ふ事を若し許容することが出来るならば、それから推斷して集合的表現、換言すれば社會的表現は、其の社會を形成して居るところの原素的意識の相互作用に依つて生ずるが、直接此の意識から生ずるのではなく、それ以上のものであると云つてもさして異常なことではないだらう。故に社會實體 (social substratum) と社會生活との關係はすべての點に於いて生理學的實體と個人の心的生活との關係に類似して居る (Gehlke:—op. cit. pp. 289) 吾人はこゝに是以上此の點に關して詳述する必要を認めないが、次ぎに是等の關係を明瞭にする爲めに、ゲールクの示す表を左に轉載して置かう。

一、個人心

- (1) 多くの腦神經は(其の相互作用に依つて)感覺を生ずる。
- (2) 多くの感覺は(其の相互作用及び結合に依つて)心像 (image) を生ずる
- (3) 多くの心像は(其の相互作用及び結合に依つて)概念 (concept) を生ずる

(4) 多くの概念は(其の相互作用及び結合に依つて)表現を生ずる。—

二、社會心

(1) 多くの個人的表現は(其の相互作用及び結合に依つて)社會的表現を生ずる。

(2) 多くの社會的表現は(其の相互作用及び結合に依つて)より高く、より純粹なる社會的表現を生ずる。

三

以上吾人は大體に於いてデュルケムの社會心理學の要領を畧説した積りである。次にデュルケムの述べるところに従つて社會心の特徴を簡単に紹介しよう。(附記。デュルケムは社會と云ふ字を社會心と同一の意義に使つて居ることがある。)

社會心の表現が如何なる特徴を有するかと云ふに、先づ第一に擧ぐべきものは個人的意識に對して外面性(exteriority)を有して居ると云ふことである。社會的表現には二種ある。一は個人心の相互作用に依つて生ずるものであり、他は此の最初の~~種~~から互に生じたもの、自律的相互作用(auto-nomous interaction)に依つて生じたものである。論理的に云へば斯くの如き表現は其の社會心を構成する一つの單位に過ぎない個人心に對しては外的である筈である。個人的意識は社會心の一部以上であり得ない。宗教的觀念は例へばトイテミズムの如く外から個人に及べるものである。更に又強制と云ふことが社會心の特徴である。これは其の外面性と云ふことに密接な關係を有して居るし、且つ社會的表現が個人的表現より優れて居ること云ふことに基いて居るものである。(Gehlke: op. cit. pp. 32—3)

元來社會心は時間、に於いても、空間に於いても、個人心より優秀でなければ

ばならない。即ち聯合し結合した個人心はそれと全く新しい種類のあるものを生ずるのである。("Les Règles de la Méthode sociologique," pp. 126—7)而して個人は社會より遙かに劣つて居るものである。何故ならば社會は多様であつて個人は簡單であるからである。斯くの如く云へば空しき真理のやうに聞ゆるかも知れない。然し數量の方面に於いても此のことはさう輕視すべきことではない。集團の大きが増加するに従つて個人は無力になる。之に反して其の全體の感情記憶等は次第に熾烈になつて來る。勿論デュルケムの此の社會心の優秀であると云ふ考は前述した個人心と社會心との關係に基くものである。各々の神經細胞が個人心より劣等であるが如く、個人心は社會心より優秀であり得ない。然し更にデュルケムは社會心は個人心よりも道德的に優秀であると云つて居る。これは最も明白に自殺と云ふ現象に現れて居る。個人的自殺は社會的傾向に従つて行

はれて居るのである。即ち個人は常に道德的事實に従ふものである。而して其の道德的事實は社會的事實である。斯くの如き社會の權威、其の道德的感銘は宗教と呼ぶべきものである。故にデュルケムは吾人各自の間に二個の意識のあることを認めて居る。即ち一つは吾人の全體に共通なものである。けれども吾人自身ではないが、然し吾人の内に活動するものである。之に反して他の一つは唯吾人一個にのみ獨特のものである。而して其の個人格を形成するものである。(Gehlke: op. cit. pp. 36—42 是等の問題に關しては尙ほ述べべき點が甚だ多いけれども、こゝには割愛する。以上デュルケムが社會心の特徴を述べて、是を其の外面性と優秀性に歸した。本章の主題たる社會の強制力は疑もなく其の社會心の優秀なるが故に生ずるところのものである。以下少しく社會の強制力に關するデュルケムの説を吟味して、而して後果して當れるか如何かに就いて述べた

いと思ふ。

四

すでに述べたやうに社會事實は其の思考、行動、感受の諸方面に於いて個人の外に存するものであつて、其の有する優秀性はこゝに強制力となつて個人を壓するのである。即ち社會事實に於いては是等は法律、道德、宗教的教義となつて現れる。故に吾人は先づデュルケムの道德に關する意見を聽かなければならない。

デュルケムは“faits n. o. aux.” “la réalité morale.” “le morale.” “les faits de la vie morale.” “les moeus.”等の語を使用して居るけれども彼の云ふ道德は勿論一定不變の絶對的道德律即ち獨逸語の Sittlichkeit を云ふのではない。唯吾人の行爲の規律的系統として表示されるものに過ぎない。斯くの如き道德規則の

特徴は大體二つの點に於いて他の規則と區別することが出来るだらう。即ち第一は責任 (obligation) の觀念である。而も單なる責任觀念として、吾人に義務の履行を強制するに止まらず、道德はかくあつて欲しきものであると云ふこと、即ち望ましきことが道德の第二の特徴である。而して斯くの如き道德は又二個の見地から觀察される。即ち主觀的にと客觀的にとである。後者にとつては社會團體内の具體的事實としての道德規則を意味するのであつて、多く一の教則として編成されてあるものである。前者は是等の客觀的な外的な道德に對する個人的表現である。今社會の強制力を論ずるに當つて、問題となるのは後者の客觀的に觀察し得るものゝみであつて、主觀的なものは問題に這入らない。

吾人が斯くの如き道德則を觀察すれば、それが義務として履行さるゝとしても、其の根柢に於いて望ましきこと (desirability) であり、よきこと (goodness)

であることを拒むことは出来ない。それと同時に他方道德則に對する恐怖若しくは尊敬と好愛とに基く崇敬の念を催すようになる。こゝに於いて一方社會に於いて強制力の一つと認められる道德は、他方連帶責任の觀念、所謂ソリダリテ(solidarité)と同一に見られ得る。如何にして斯くの如き觀念が生じて來たのか。それは社會心と云ふやうな超越的實在の前にあつて、個人が痛感する其の無力と依頼性とに基くものである。且つ亦個人がある種の行動をなす場合、社會心の一部として其の分を果たすと云ふ點からして喜悅の情を感じ、更に一層斯くの如き道德を崇高なものと思ふに至るのである。更に此の問題の具體的解答として、デュルケムは分業(*la division du travail*)を以つてして居る。

分業は單に經濟的の現象に止まらない。更に廣い社會的意義を有して居る。例へば學術的研究の如き如何に各自専門々々に分業が行はれて居るかに依つても知り得るであらう。今こゝに此のことに關して一々論究する餘裕を持たない。唯、今少しく個人と社會の強制力との關係に就いて述べようと思ふ。

デュルケムの言葉を以つてすれば、分業は吾人の社會の存在條件である。分業の爲めに社會の強制力は確實となり、且つ分業に依つて社會構成の主要なる特色が決定されるのである。¹⁾ (*La division du travail social* p. 27) 故に吾人がある社會に結びつける度合は社會の連帶責任に比例するものであり、斯くの如き結合の義務は外界には法律として表示される。従つて社會の連帶責任の程度は大體に於いて斯くの如き法律の數に依つて測定され得る。今個人の立場に立つて社會から強制される程度を考へて見やう。吾人は上述の理由から二個の意識を持つて居る譯である。即ち一つは自己に對して人格的なものであり、個人としての吾人の特徴である、心的状態を

有い、他の一つは社會團體全部に共通なる心的状態を有するものである。一個人を其の社會に結合させるところのものは、其の個人の内に存して居る上に述べた二個の心的状態の聯帶責任觀念に外ならないのである。而して個人の社會團體に結合する其の強度は次ぎの三つに依つて變化する。

- (一) 上述せる共通の意識の容量と個人的意識の容量との比例。
- (二) 集合的(即ち共通の)意識状態の平均強度。
- (三) 是等の集合的意識状態の決定力(determination)の程度。

而してデュルケムは「類似に依つて起る連帶責任が其の最大なるは集合的意識が吾人の全意識(個人的)を正しく包含し、すべての點に於いてそれと一致する時である。此の際に於ける吾人の個人性は皆無である。」(“Div. d. Tr. soc.”: pp. 99—100) と云ふ。故に明かに個人性はソリダリテに羈束される。ソリダリテ、即ち社會の強制力となるのである。従つて若し此のソリ

ダリテを破る者があるとするならば、勢い刑罰に附する必要が生じ、こゝに所謂法律の制定を促がすことになるのである。デュルケムは法律の形式を分けて禁制的(repressive)と賠償的(resistutive)にして居る。然しこゝには是以上此のことに就いて論究する必要はないと思ふ。要するにデュルケムの云ふ道德なるものは、ソリダリテの源泉であるものすべてを指すのである。故にデュルケムの議論は何處までも此の章の最初に述べた個人心、社會心の觀念を離れないのである。個人は腦細胞の一部と等しく、社會に對して其の一部分以上の價值を有して居ないのである。是は果して正しい觀察であらうか。以下節を變へて少しく余の考ふるところを述べたいと思ふ。尙ほデュルケムの倫理觀に就いては前掲ゲールクの著書第七章に詳述してある。

五

吾人の日常行爲を拘束するものは何であらうか。家に居る際にも、往來を歩く時にも、將た又獨りで居ても多數の内にあつても、其の行爲は完全に自由であると云ふことは出來ない。かゝる拘束力に二種あると思ふ。一は其の強制力が唯自己一個に止まるものである。多くの場合自己の意欲を満足するに過ぎない。第二は第一の内的なるに對して、外からは是を強制せんとするものである。云ふ迄もなく、社會の強制力と稱せらるゝものは後者である。

ギルド社會主義 (Guild Socialism) の一人コール (G. D. H. Cole) は其の著「社會學說」"Social Theory" に於いてかゝる社會の強制力を三種に區別して居る。第一は個人の財産に對するもの、所謂罰金である。デュルケムが賠償的と

名付くるものは大部分是であらう。第二は個人の行動の自由を、其の範圍を制限することに依つて拘束するものであつて、政府で採るある手段、又はかの「黒表」"blacklists"の如きが是である。第三は直接個人の身體を拘束するものであつて、拘留、監禁、拘足等から銃殺其の他の死刑はすべて是に屬するものである。G. D. H. Cole: op. cit. p. 129) デュルケムの所謂禁制的なるものは略々此の第二、第三の兩種を包含するものであらう。云ふまでもなくコールの示す第一のもの、内にも禁制的のものがあり得る。然しこゝに吾人が問題とするのは、かゝる外的に表示されたる實際的の強制力そのものに就いて論ずるよりも、寧ろかゝる強制力が何故に社會に附與されるかと云ふ點にある。今こゝにコールとデュルケムとを對立させてみると、前者がルソー (Rousseau) の社會契約説と類似して居るのに對して、後者は社會連帶責任説を稱へて居る。コールが社會よりも寧ろ個人を尊重せるに對

いて、デュルケムは社會の人格(Personality)を高唱して個人を没却して居る。是等兩者の何れが眞であるか、一々比較論評するのは極めて興味多いことではあるが今は其の餘裕がない。直ちに強制力其のものに就いて少しく考察して、而してその依つて生ずる所以を明かにしたいと思ふ。

六

上述せるコールの示す社會の強制力三種以外に同じく社會としての強制力がある。慣習や因襲等の結果、若しくは社會に於いて何等法的制裁の存在して居ないにも拘らず、一種の責任觀念を催す等がそれである。デュルケムが其の「自殺論」に於いて自殺に三つの種類があるとして居る。即ち利己的、變則的、及び利他的の三種である。利己的の自殺と云ふのは其の個人の屬する團體が其の者に對する勢力を喪失して、最早其の者の連帶責任

がなくなり、而も他の強大なる社會に依つて是と對抗する勇氣のない者が自殺する場合の如きである。即ち自己の苦痛を厭ふ點に於いて利己的であると云へよう。次ぎの變則的自殺と云ふのは、例へば經濟的恐慌の如き個人に對する社會の規則的支配が不時破られた時に起る自殺である。第三の利他的自殺と云ふのは名譽に對する奉仕の如きがそれである。是等の自殺と云ふ現象が依つて生ずる所以、並びに社會が何等かの行爲に對して、刑罰を行はなければならぬ所以は何であるか。即ち個人として社會と相反する意思表示を有して居るからに外ならない。デュルケムが個人心を腦細胞に比較して、こゝに偉大なる社會心を建設したのは、すでにゲールクも指摘して居るやうに、間違つた類推であると云はなければならぬ。所謂偉大なる天才に關する問題は暫く除くとしても、ゲールクの著書第六章デュルケム思考法の重なる前提。前述せるやうにある個人が社會

全體に對して反對の企圖を抱くと云ふ事實は、少くとも社會あつての個人に非ずして個人あつての社會であることを語るものではないのか。若し社會に對して不平不滿を有し消極的態度を採るならば、其の者は自殺——デュルケムの云ふ第一の種類 of 自殺となつて現れ、積極的態度に出づる者はコール、デュルケムの擧ぐる刑罰に依つて社會的の強制力を受けるやうになるだらう。是等は何れも社會の強制力に對して否認の態度を表する者である。然るに他方之に反して社會の強制力を是認して而も自殺の行動を敢てするものがある。即ち前に述べた慣習、因襲、若しくは名譽心等の結果是を行ふものである。これは社會に對する恐怖、若しくは宗教的の信念から自己を没却し、社會の強制力に服従させられる者である。

以上の論述に依つても畧々明かであるやうに、社會の強制力は個人に依つて是認されることもあれば、否認されることもある。又それが自覺的に

なされる、こともあれば、無自覺的になされる、こともある。是等の事實は、そもそも何を語るものであらうか。是等の事實と文化發展の過程との間に何等かの關係はないだらうか。以下此の點に就いて少しく論及し本章を結了したいと思ふ。

七

先づ問題は原始人に對して起るべき筈である。此の點に就いては余は寧ろデュルケムの考察を尊重する。原始人の生活は何等個人の人格を考慮するところなく、全社會團體の爲めには其の強制力に對して無自覺に服従して居た。若し個人が此のまゝに發達したとするならば、恐らくデュルケムが示す如く、個人心は社會心の一要素であるに過ぎなかつたかも知れない。宗教的畏敬の念は常に偉大なるもの、異常なるものに對して拂はれ

其の前には絶對的に畏服し、彼等の行動は一に本能的衝動に依つて支配されて、少しの反省さへも行はれない。蓋し是は人類生活の本能的衝動生活であつて、現在と雖も其の生活を支配すること極めて大である。此の場合、社會の強制力は絶對である。殆どそれを強制力と意識しない。恰も個人心の内にあつて存在し得ぬ精神細胞が除却されると等しく其の個人は没却されるのである。然し尙ほ細胞と個人心との關係を直ちに移して個人心と社會心との關係に宛てるのは正しくない。況んや個人と社會の關係を有機体内の細胞と有機體との關係を以つて律することは出来ない。類似はして居るが同一ではない。有機體の細胞がそのまゝでは各自の分裂を許されないと云ふ點だけでも個人とは相違して居るだらう。

然るに又人類の生活過程は同一の状態を何日までも繼續しては居なかつた。即ち社會の強制力に對して是非、當不當の判斷を下すやうになつた。

然し社會は依然として強制力を有して居る。此の點から見てコールが社會の強制力を是認しようとしたのは當然であると云へよう。以下少しくコールの社會觀に就いて述べよう。コールに依れば各人類が單にある種々の關係から集合して居ると云ふだけでは、是を社會と稱するには足りない。それでは單なる一つの團體 (community) に過ぎない。社會は人類の單なる結合團體を云ふのではなくして、社會的行爲のある方面に於いて完全に表示された觀念、若しくは共同生活の基本をなす假定の一部を形成する觀念、是等の制規を以つて——ある場合には認められた慣習であることもあるし、又は社會的因襲の形式をなすこともある。——形成され、種々な職分を異にして居るところの聯合 (associations) である。然らば吾人が何故に斯くの如き聯合を作るやうになつたのだらうか。そは心理的なる欲望に外ならない。而して聯合の形式は不斷に變化するものであるが、大體に於いて其の

個人と團體の一致
共同社會に強制力あり